

---

# バカとリリカルとゴッドイーター

夜叉龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとリリカルとゴッドイーター

### 【Nコード】

N1971T

### 【作者名】

夜叉龍

### 【あらすじ】

やっちまった感120%！。でも後悔はしてません！。ゴッドイーターのキャラが！。リリカルなのはのキャラが！。明久達Fクラスの面子とどたばたやっちゃいます！。ちなみにカップリングは明久×瑞希。明久×美波ではありません。これらじゃなけりやだ。って方はバックしてください。

## 1問 2組の幼なじみ（前書き）

はいどうも夜叉龍です。 やったしまった感半端ないです。

ちなみに更新は亀です。感想お願いします。では！。

## 1問 2組の幼なじみ

文月学園 ― 科学とオカルトと偶然というわけの分かんない理屈で生み出された試験召喚システムを取り入れた学校。

その校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

その坂道を3人の男女が歩いている。

「ふわあ、眠い……。」

銀髪まじりの肩より少し長い黒髪をした少年―青葉 空が眠そうに欠伸をしながら歩いている。

「新学期前日まで夜更かしするのがいけないんでしょうが。自業自得よ。」

肩にかかる程度の長さの髪をした少女―木下優子があきれながら言う。

「空にも困ったものじゃな。大方ゲームが区切りよく終わらなかつたんじゃない?。」

独特の言葉使いをした優子に瓜二つの少年で彼女の双子の弟―木下秀吉が苦笑混じりに言つと、

「そうなんだよ秀吉。昨日パーティーのみんなが放してくれなくてよ。まあ、おかげでアルバリオンを結構討伐できたからいいけ

どな。」

空はからからと笑いながら返した。

「はあ、全くあんたは????????。」

優子はかなり深いため息を吐いた。

—————

「おはよう、木下姉弟、青葉。」

登校してきた3人に挨拶したのは浅黒い肌に短髪そして筋骨隆々とした男西村先生である。担当は生活指導。

「おはようございます。西村先生。」

「おはようございます。西村先生。」

「おはようございます、鉄??????西村先生。」

「さて青葉。お前今鉄人って言おうとしなかったか?。」

鉄人とは西村先生の生徒の間でのあだ名のことである。その理由は趣味のトリアスロンと冬でも半袖でいることから来ている。

「気のせいですよ、西村先生。ふわあ????????。」

空はまた眠たそうに欠伸をした。

「お前は???????。新学期初日からそれでどうする。」

西村先生が呆れまじりに言うと、

「すみません。後でアタシが言って聞かせます。」

優子が謝り、秀吉は苦笑を浮かべている。

「はあ、まあいい。それよりほら、お前達の振り分けだ。」

西村先生が箱から封筒を取り出し、3人に1つずつ渡した。

「むう、わしはFクラスじゃ。」

秀吉が自分の封筒の中身を見てうなづいた。

「アタシはAクラスよ。まあ、当然ね。?????????????」  
空は?。」

優子は自分の結果に満足そうに頷き、そして空にふった。その目は同じクラスになることを期待しているように見える。

「ん。」

空が突き出した紙に書いてあったのは、

青葉 空 Fクラス

の文字だった。

「「な、なんで（じゃ）！？」。」

優子と秀吉が全く同じタイミングで叫んだ。それを見た空は双子のなせる技だなあ、と全く関係ないことを思った。

「な、なぜじゃ！？。なぜ空がFクラスなのじゃ！？。空の実力なら最低でもBはいくと思うておってたのに！」

「確かにそうなんだけど?????????。」

空が気まずそうに頭を掻いていると、

「空。まさかとは思っけど、寝落ちしたんじゃないでしょうね。」

優子が半眼で睨みながら言うと、

「あはははは?????????」名答。」

空は力無く笑うと肯定した。

「やはりか。」

秀吉はやれやれと言わんばかりにため息を吐き、優子は頭を抱えている。

「3人共いつまでもやってないで早く教室に行ったらどうだ？」

いつまでも動かない3人を見かねたのか西村先生が助け舟を出した。

「それもそうじゃな。行こう姉上。」

「????????ええ。」

「いや、優子、本当にごめん。」

そして3人はそれぞれ教室に向かって歩いていった。

それからしばらくすると木下姉弟と空が歩いた道を4人の男女が走っている。???????全速力で。

「はあ、はあ、遅刻したらアキ君のせいだからね!。」

そう言うのは茶髪をサイドポニーにした少女ー高町なのは。

「だからごめんて!。」

そうなのはに謝っているのは同じく茶髪の少年、吉井明久。

「だ、だいたいなんで玲さんの古いセーラー服があるの!?。」

そう言うのは金髪を下ろした少女ーフェイト?T?ハラオウン。



「知らないよ！。全部姉さんが持ち帰ったと思ったのに！」

「せやけどあつたやん！。ちゃんと確認ぐらいしといて！。というかちよつと取り出した時点で気づいて！。なんで3/1も取り出してから気づくん！？。」

明久の言葉に反論するのは明久と同じ茶髪の少女ー八神はやて。

この4人は小学校のころからの幼なじみだ。FFF団が見たら間違いない嫉妬に狂うだろう。

ちなみになぜ彼等が走っているかと言うと、遅刻しそうだからである。その理由はまずなのは、フェイト、はやてが明久を迎えに行ったが、明久は熟睡中。それを3人がかりで起こし、そして朝ごはんを食べ終えた後外で待ってたがなかなか明久が出てこず、様子を見てみると何故か彼は姉の吉井 玲のお古のセーラー服を取り出し、それを3人で慌てて止めていたらこうなったのだ。

「遅刻だぞ！。吉井、高町、ハラウン、八神。」

登校してきた4人に告げたのは木下姉妹と空の時と同じ西村先生だった。

「おはようございます。西村先生。」

「おはようございます。西村先生。」

「おはようございます。鉄?????西村先生。」

「おはようございます。鉄じ?????西村先生。」

「まて、吉井と八神は鉄人と言おうとしなかったか?。」

「気のせいですよ。西村先生。」

「アキ君の言う通り気のせいや。西村先生。」

「ん、そうか?。」

なんとかごまかせたー、と2人は内心はあ、とため息を吐いた。

「それより普通におはようございますじゃないだろ。」

「あ、遅刻してすみません。」x2

「えーと?????今日も肌が黒いですね。」

「えーと……今日も暑苦しそうですね。」

「?????????吉井と八神には遅刻の謝罪よりも俺の肌の黒さと暑苦しさの方が重要なのか?。」

「すみません、すみません。」x2

なのはとフェイトがぺこぺこと頭を下げている。

「まったくお前は????????? まあいい。それよりほら受け取れ。」

そう言うとき西村先生は箱から4枚の封筒を取り出し、4人に渡した。

「それにしてもどうしてこんな面倒なやり方でクラス発表するんですか?。掲示板に大きく張り出しちゃえばいいのに。」

明久が素直に思った疑問を口にした。

「普通はそうするんだがウチは世界的にも注目されているシステムを導入した試験校だからな。このやり方もその一環ってワケだ。」

ふーんと明久は頷いた。

「それにしてもハラオウンは残念だったな。ちゃんとテストを受けていればAクラスに行けたのに。」

「いえ、体調管理を怠った自分が悪いですから。」

フェイトは封筒を受け取り、言う。

「そうか。所で高町に八神。なんか2人のテスト用紙は完全な空欄だったんだがどうしたんだ?。名前すら書いてなかったぞ。」

その言葉になのはとはやては視線をさまよわせる。

「え、えっと??????? 前日に一生懸命勉強やってたらほぼ完徹になっちゃいまして???????」

「え〜と私もなのはちゃんと同じで?????????。」

「はあ。つまり寝てしまったのか。」

西村先生が深いため息を吐いた。

「ははは、まったく2人は?????。頑張るのはいいけど、  
ほどほどにしないと。」

明久は苦笑を浮かべながら言う。

その顔を見て2人は思わず顔をそらした。言える訳がなかった。  
明久と同じクラスになりたいがために白紙にしたなど。

「あとそれから吉井。」

「はい?。」

「これは俺個人の意見だがお前のやった事は人間として誇れるもの  
のだ。胸を張れ。」

「?????????はい!。」

明久は笑顔で頷いた。それを見て事情を知っているのは達も笑顔  
になった。

そして4人は封筒を開け中身を改めた。

吉井明久 Fクラス。

高町なのは Fクラス

フェイト？ T？ ハラオウン Fクラス

八神はやて Fクラス

彼等の最低の学園生活が始まった。

## 1問 2組の幼なじみ（後書き）

ゴッドイーターのキャラオリしか出てねー！！。次回は設定を書きます。

これもゴッドイーターぐらいみなさんに読まれたらいいなあと思います。では！。

## 第2問 O H A N A S H Iと自己紹介（前書き）

本当は設定に行きたかったんですが、ゴッドイーターのキャラがほとんど出てないのでこれにしました。これまでに無いくらい駄文ですがどうぞ！。

## 第2問 OHANASHIと自己紹介

「????????何だろう、このバカでかい教室は。」

「教室をこんなに大きくする必要ないよね????????。」

「だよね。もうちょっと小さくてもいいよね????????。」

「格差社会が目のあるわ????????。」

4人が去年ほとんど行ったことのない3階に行きますまず目にしたのは普通の5倍はあろうかというAクラスの教室だった。

4人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性――学年主任の高橋洋子が立っていた。

「あ、高橋先生だ。」

「やっぱりあの人が担任なんやな。」

フェイトとはやてが揃って言う。

一方明久となのははAクラスの設備に目を向けていた。

「ねえ、あれ！。冷蔵庫とエアコンが個人である！。」

「ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！。」



そのあまりの設備に2人は度肝を抜いていた。

「私、Aクラスじゃなくてよかったかも。」

フェイトがポツリとつぶやいた。

「かもね。フェイトだったら逆に緊張して勉強出来なくなるかもね。」

明久が苦笑をしながら返した。

「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来ててください。」

「????????はい。」

名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女―霧島翔子だった。

「ねえ、3人はあの噂ってどう思う?。」

「噂ってあれ?。霧島さんは同性愛者っていうやつ。」

「うん。それ。」

翔子は一年生の頃からその容姿で多くの男子から告白されてきたが、彼女はそれをすべて断ってきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうにならざるやうになった。

「ちがうんじゃないかな。」

フェイトが否定した。

「そう?。」

「もしかしたらずっと1人の男の子を想い続けているのかもしれないよ?。」

「そつか?????。もし、そうならその男の子は幸せだね。霧島さんみたいな美人に想いをよせられて。」

明久の言葉に3人はうん、と頷いた。

「それじゃあ私達も行こっか。」

なのはの声に3人共頷き、Fクラスの教室に歩き出した。

「アキ君。私達いつのまに山奥にきちゃったの?。」

「なのは。現実逃避したくなる気持ちは分かるけどちゃんと見つめようね。」

今彼等が目になっているのはとても教室とは思えない、それこそ山奥の山小屋のような教室だった。

「これは??????? Aクラスとは真逆の意味ですごいね。」

「これが勉強する環境なんやろか。」

そのあまりのひどさに4人は絶句していた。

「と、とりあえず中に入る。きっと外よりはマシだよ。」

いつまでも突っ立てはまずいと思ったのか明久が切り出した。

「そ、そうだね。外見だけだね。中は少なくともちゃんとしてるよね。」

「そうだよな。ちゃんとしてるよね。勉強する所だもんね。」

なのはフェイトがうんうんと頷く。

「それじゃあ私が先陣きらせてもらっわ。」

そう言うとはやては教室の戸を開け、

「すいません。ちょっとおくれ「遅いぞウジ虫やる?????????  
?。「は?。」

入って初めてかけられた言葉は凄まじい罵声だった。

「え!?! いや、すまん!。明久だと思って勘違いして「アキ君をウジ虫呼ばわり?。」へ?。」

その声にツンツンと立った短髪の少年で先ほどはやてに罵声を浴びせた少年―坂本雄二はその方に目を向けた。

そこには魔王と悪魔がいた。

「ふゝん。はやてちゃんを会い頭にそう呼んでさらにはアキ君をそんなふうに呼ぶんだ坂本君は。」

「これはちよつとOHANASHIする必要があるよね。」

なのはとフェイトはにこりと笑みを浮かべている。目は一切笑っていないが。ちなみにはやては突如の罵声にうなだれ、明久がよしよしとなくさめている。

「ち、ちよつと待ってくれ！。言い過ぎた。俺が悪かった！。だから????????あ、明久！。助けてくれ！」

2人の尋常ではない殺気にたまらず雄二は明久に助けを求める。

「2人とも。」

明久がはやてをなくさめながらなのはとフェイトに話かける。

「なに?。」

2人はいくらか殺気を収め振り返る。

「ほどほどにね。」

明久の口から突き放す言葉が飛び出した。

「うん、分かった。」

「待て明久！。見捨てるな！」

雄二は必死に明久に助けを求めるが、

「ごめん雄二。今の2人を止めることは僕にも出来ないよ。」

と明久は言った。実際自分に向けられてないのに明久は冷や汗がナイアガラと滝のように流れていた。

「じゃあOHANASHIしよつか。坂本君。」

なのはがゆつくりと雄二に近づいていくと、

「すいません、ちょっと通してもらえますか？」

背後から声をかけられた。

そこには寝癖付きの髪にヨレヨレのシャツを着たおじさんが立っていた。

「席についてもらえますか？。HR始めますので。」

「はい分かりました。」

「はい！（た、助かったー。）」

「はい。（残念。）」「」

「?????はい。」

5人はそれぞれ席に向かう。

「え、担任の福村慎です、よろしくお願いします。」

教壇に立った福村先生は自己紹介をし、黒板に名前を書こうしたがその手を止めた。理由はチョークがないからである。

「皆さんに卓袱台と座布団は支給されてますか?。不備があったら申し出て下さい。」

「これで不備がないって言う人に会ってみたいよ。」

「にははは。私も同感。」

明久が呟くと後ろのなのが同意してきた。

それもそうだろう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープが貼られている。

もちろんそれに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。」

スクツ。「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

次はその前の少年が立った。

「青葉空だ。趣味はハンティングゲームと昼寝。秀吉とは幼なじみだ。その姉貴の木下優子共な。」

「『異端者には死を！』」

空の言葉にFクラスの面子の大半がカッターを構えたが、

「言つとくが俺は近くの空手道場で師範のバイトをしている。鳩尾に正拳くらいたかつたらこい。（ゴキッ）」

「『すんませんでしたー！！』」

空が言い放ち手の骨を鳴らすと全員謝った。

それを見て空は座った。

「空、ああ言つふうに言わんでも。危険人物と思われるぞ。」

秀吉が空に話しかけると、

「しかたねえじゃん。ああしねえと俺はカッターダーツの的にされてたんだぞ?。」

空の言葉に秀吉は苦笑した。

「????????土屋康太。」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年―土屋康太だ。彼はムツリ―ニというあだ名を持っているが本名よりもそっちの方が知名度が高い。

しばらく自己紹介が続き次に立ったのは明久より濃い茶髪の少年。

「藤木コウタだ!。よろしく頼むぜ!。趣味はアニメ鑑賞だ。」

と元気が歩いているような少年―藤木コウタだ。

そして次に立ったのは、

「アリサ?イリーニチナ?アミエーラです。ロシアから2年前に来ました。よろしく願いします。」

淡い色の髪を伸ばした美少女―アリサ?イリーニチナ?アミエーラだ。

「あつ、ちなみにコウタとは中学の同級生です。」

「おいアリサ!。それ言う必要がある???危ね!。」

コウタが避けた瞬間畳に多くのカッターが突き刺さった。

「ちよつと待てお前ら!。マジで当てるつもりだったろ!?。」

コウタが冷や汗をかきながら言うが、



「『だまれ!。異端者!。』」

Fクラスの大半の面子は第2射の準備をした。が、

「みなさん喧嘩は止めてください。」

福原先生に止められ全員とりあえず引つ込めた。

そしてまたしばらく自己紹介が続いて、

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味は―」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女―島田美波は一回区切り、

「吉井明久を殴る事です。」

と言った。

その瞬間なのは、フェイト、はやてはきつ、と美波を睨みつけた。

「な、何?。」

突然の事に美波はうろたえる。

「別に????????。」

「ただ、最低な趣味だと思っただけ。」

「その通りや。」

3人はただそれだけ言うと視線を外した。

「3人共どうしたの?。」

状況がよく分かっていない明久が聞く。

「ううん、何でもないよ。」

「大丈夫だから気にしないで。」

「アキ君が気にすることは何もあらへんよ。」

3人はそれぞれ笑顔で言った。

「???????です。よろしく。」

今度は明久に回ってきた。

「ーコホン。えーつと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね」

次の瞬間、

「ーダアアーリイーン!!。」

野太い男の大合唱。

「????????失礼、忘れてください。とりあえずよろしく

お願いします。」

明久は吐きそうな顔で座る。

「アキ君?????。」

流石のなのはもこれはきつかったらしく明久に非難の眼差しを向ける。後ろのフェイトとはやてもジト目である。

「ごめん。後なのは、次だよ。」

明久は振り返って謝り、なのはを促した。

「うん。」

頷いてなのはは立ち上がった。

「高町なのはです。明久君、フェイトちゃん、はやてちゃんとは幼なじみです。」

「「「吉井を?????。」」」

「ちなみに明久君に危害を加えたらOHANASHIですからね。  
(ニコッ)」

「「「Y、Yes Sir!」」」

なのはの目が笑っていない笑顔に全員恐怖を覚えた。

「フェイト?T?ハラオウンです。ちなみに私も明久君になんか

やったらOHANASHIしますの。特にM？Sさんには目を光らせておきますの。」

フェイトはそう言うところりと美波に視線を向けた。

「八神はやてです。私もなのはちゃん達を似たようもんや。あ、でも坂本君にはさっきの件でOHANASHI決定やからな。」

はやては雄二に目を向ける。

「いや本当にすまん！。頼むからOHANASHIは勘弁してくれ！。この通りだ！。」

雄二が必死に謝っていると、

「あの、遅れて、すいま、せん。」

「「「え？。」」」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

## 第2問 O H A N A S H Iと自己紹介（後書き）

これで主要キャラはほとんど出ました、ゴッドイーターにはもう数人キャラがいますがそれは後ほど。感想待ってます。次こそは設定です。では！。

設定！。  
(前書き)

やっとこさ投稿できました。とりあえずこの設定を崩さないように  
行きたいです。

では！。

5 / 3 0    フェイトの点数変えました。よく考えたら化け物すぎ  
ました。

設定！。

ゴッドイーターサイド

青葉 空くあおば そら>

身長 172cm

外見 フェイスエディット1で髪は肩まで届く長さ。色は黒だが所々に銀髪が混じっている。

趣味 昼寝 ゲーム（特にハンティングタイプ）

成績 生物以外180〜220程。生物410〜420

木下姉弟とは幼なじみの少年。性格は幾らかマイペースな所があるが基本面倒見がいい。ボケは基本せず、ツツコミをしていく。勉強は真面目に取り組むが眠気には絶対勝てず眠いと思った直後には落ちている。だが歩いている時はさすがに寝ない。Fクラスに入った理由は寝落ち。

酒に極端に弱く、ほんのちよつとでも飲んだらまるで別人のように凶暴化し暴れる。

1年前から両親が仕事で海外に行ってるため1人暮らし。家事は普通にこなせ、料理は人並み以上にうまい。

空手を4歳からやっており、今では自分が学んだ道場で師範バイトをする程の腕前。

秀吉は空を親友として兄貴分として頼りにしている。優子は彼と何かと張り合うが好意を寄せている。

#### 召喚獣

F制式上衣と下衣。色はコバルト。

新型神機 銃身 ヤタガラス真 刀身竜殺し 炎獄 装甲 剛炎  
タワー真

腕輪 ブラッドレイジ 螺旋を描く紫の炎を放つ。一撃で50点消費する。また、消費する点数を増やすことで威力と範囲を上げる。100点 Lv1。200点 Lv2。400点 Lv3。Lv3の時は範囲はBクラスの教室半分。威力は教師の召喚獣を一撃で消せる。

#### 藤木コウタ

家族は両親と妹。ただし父親は単身赴任で家にいない。

アリサとは中学校3年の時同じクラスだった。

成績 全科目50～80点。

召喚獣 アリーキャットに旧型神機。銃身 モウスイブロウ

腕輪 拡散型ミサイル。4発のミサイルを放つ。一回で70点消費。空と同じように消費点数を増やすことで、ミサイルの数を増やす。Lv1消費点数140点。6発。Lv2消費点数230点。



8 発。 L V 3 消費点数 3 2 0 点。 1 0 発。

アリサ？イリーニチナ？アミエーラ

中学 3 年の時にコウタの中学校に転校してきた。両親は健在だが、今は仕事でロシアに帰っている。

F クラスに入った理由は風邪で試験を休んだため。

成績 世界史と古典以外 2 2 0 ～ 2 4 0。世界史 4 0 0 点代。古典 3 0 点代

召喚獣 ミューティニアに新型神機。銃身 レイジンググロア。刀身 アヴェンジャー。装甲 プリムストーン

腕輪 ホーミングレイ。敵を追尾する 5 本のレーザーを放つ。 1 発 6 0 点。消費点数を増やすことで本数と威力を増す。 L V 1。消費点数 1 5 0 点。本数 9 本。 L V 2。消費点数 2 4 0 点。本数 1 2 本。 L V 3。消費点数 3 1 0 点。本数 1 5 本。

リリカル側

高町なのは

明久とは赤ちゃんの頃からの付き合い。 3 人の中で一番付き合いが長い。今ではいざという時に目で意志を通じあえる。

幼稚園の頃から明久の事が好きで家族のみなさんも明久だったからと言っている。

Fクラスに入った理由は明久と同じクラスになりたいがために白紙にしたから。

成績 数学以外110〜130点。数学200〜240点。

召喚獣 バリアジャケットにレイジングハート

腕輪 砲撃。消費点数300点。極太の砲撃を放ち斜線上をなぎ払う。つまりスターライトブレイカー。

フェイト？T？ハラオウン

小学校の頃に明久となのはの学校に転校してきて、なのはと知り合いそこから明久とも仲良くなった。

なのは同様明久に好意を寄せている。

Fクラスに入った理由は試験を風邪で休んだため。

成績 世界史以外200点代。世界史500点代。

召喚獣 バルディッシュにバリアジャケット。

腕輪 ザンバーフォーム。バルディッシュを大剣に切り替える。消費点数60点。一度切り替えるとそのままの状態になる。

八神はやて

フェイトの後に明久達の小学校に転校してきた。

明久とは親友のような関係で実はとりたてて特別な好意は持っていない。

恋はどちらかというと応援するほう。今はなのはとフェイトの恋を応援している。

Fクラスに入った理由は明久と一緒にの方が楽しくなりそうだからと白紙で出したため。

成績 全科目130〜140

召喚獣 シュベルトクロイツにバリアジャケット。

腕輪 砲撃。消費点数300点。なのはの砲撃に似た一撃を放つ。  
ただしこちらは範囲は広いが威力が低め。

バカテス側

明久は原作よりちょっと頭が良くなり、召喚獣が原作8、9巻の  
になってます。

明久の強さが上がってます。恐らく雄二とタイマンはれるかもしれませんが。（理由、なのはの家の道場に通ってたからです。ちなみになのは達も明久にくっついてやってたため結構強いです。）

明久は姫路にとりたてて恋心は抱いていません。友達として見えます。

優子の性格が丸くなっています。

設定！。  
(後書き)

こんな感じでいきます。ちなみに他のみなさんは原作沿いの性格ですが展開で変わっていくかもしれません。ちなみに重苦しいタイプの設定は全部取っ払ってます。ではまた次回！。

### 第3問 戦争の引き金（前書き）

本当に亀更新ですいません。

仕事が忙しすぎます。

ではどうぞ！

### 第3問 戦争の引き金

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそうだろう。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。しかしその中で明久、なのは、フェイト、はやては冷静だった。彼女がここに居る理由を知っているからだ。

「ちようどよかったです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします?????」

福原先生に促され小柄な身体と背中に届くまでの柔らかそうな髪を持った少女ー姫路瑞希は自己紹介をした。

「はいっ！質問です！」

すると1人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいますか？」

聞き方によつては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしれない。

元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほどに高い。

そんな彼女が学年最下位のFクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだろう。

「そ、その???????振り分け試験の時に高熱を出してしまいまして????????」

この学園の試験は途中退席した場合再試験もなしに0点扱いになっ  
てしまう。

するとそこかしこでなにやら言い訳の声上がり始めた。

「そういえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」

「ああ、化学だろ？あれはむずかしかったな。」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力出し切れなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくて。」

「「「異端者には死を!!!!」」」

「すんません！嘘つきました！」

これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしく願います！」

そう言つと瑞樹は明久と雄二付近の空いてる席に着いた。

「き、緊張しました〜」



そう言って瑞希が卓袱台に突っ伏すと、

「瑞希ちゃん、久しぶりだね。」

「瑞希も同じクラスなんだね。」

「いやゝ奇遇やね。」

なのは達が声をかける。どうやら瑞樹がここに来た理由は知らない事にするらしい。

「え！？なのはちゃんにはやてちゃん、フェイトちゃんまで！？  
どうしてここに！？」

驚きを隠さず瑞希が聞くと、

「私は試験を風邪で休んじゃってね。」

「私は・・・・・・・・ちよつとね。」

「私も・・・・・・・・ちよつとな。」

3人はそれぞれの反応で返す。

「あのさ姫「姫路」・・・」

話が一区切りついたところで明久が声をかけたが雄二がかぶせるように声をかける。

「は、はい。何ですか？え〜と・・・」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしく願いします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。

「ところで瑞希ちゃん。体調の方は大丈夫なの？」

「あ、それは僕も気になる。」

なのはが声をかけると明久もかけた。

振り分け試験の時明久は瑞希の隣の席に座っており、倒れた時は保健室まで付き添ってあげていた。

「よ、吉井君！？」

明久を見て瑞樹は驚いたように声を上げる。

「姫路。明久がブサイクですまん。」

「そ、そんな！目もパッチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！」

「せやな。少なくとも女の子を出会いがしらにウジムシ呼ばわりするだれかさんよりかはイケてるなあ。」

はやてが雄二を見ながら言う。どうやらそうとう深いキズを負っ

たらしい。

「うぐっ・・・ま、まあ確かに見てくれは悪くないな。そういえば俺の知り合いにも明久に興味を持ってる奴がいたな。」

「え、それって誰「それって誰ですか!?!」」

明久を遮って瑞希がすごい勢いで聞いてくる。

「確か久保ー」

「久保?」

「利光だったかなあ。」

久保利光ー（性別 オス）

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。」

「もう僕お婿に行けない。」

その明久をお返しというようにはやてがよしと慰める。

「安心してアキ君。いざとなったら私が貰ったげるから。」

「「「はやて（ちゃん）!?!」」」

はやての発言になのは、フェイト、瑞希は仰天した。

「冗談やて3人共。私にとってアキ君は親友やてことは分かって

るやろ。」

はやてはからからと笑った。

「はいはい。その人達静かにしてくださいね。」

福原先生が教卓を叩いて注意をする。

「あ、すいませ……。」

バキッ（教卓が碎ける音）

バラバラバラ（破片が崩れる音）

教卓がゴミ屑になった。

「えゝ替えを用意してきます。少し待っててください。」

そう言つと福原先生は教室から出て行つた。

それを見た明久は何か考え込むと、

「……雄二、ちよつといい？」

「ん？なんだ？」

暇になったからか欠伸をしている雄二に明久が声をかける。

「ここじゃ話にくいから、廊下で。」

「別に構わんが。」

2人は立ち上がって廊下に出る。それを空はちらりと見ると、自らも立ち上がった。

「んで話つて?。」

廊下に出た所で雄二が切り出した。

「この教室のことなんだけど」「何だ?何の話すんだ?」って空君  
!?。」

明久が話そうとした所で空が割り込んできた。

「空でいいよ。ささ、続けて。」

「う、うん。で雄二この教室の設備なんだけど。」

「ああ、想像以上に酷いもんだな。」

「空もそう思うでしょ?。」

「そうだな。こいつはあまりにもな……。」

「でAクラスの設定は見た?。」

「ああ、凄かったな。あんな教室は見たことがない。」

「それ以前にあれば教室の括りに入るのか？ここもそうだけどさ。」

空がどこか呆れたように言う。

「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試召戦争をやってみない？」

「いきなりAクラス相手にか！？」

空が驚いたように声を上げる。

「……何が目的だ。」

雄二が警戒するように目を細め明久を見る。

「2人の前じゃ誤魔化しても意味ないと思うから素直に言っけど、理由は姫路さんとはやての為だよ。」

その言葉に空はん？と首を傾げた。

「なあ、明久。姫路は体が弱いからと分かるが八神は？」

「ああ、はやても子供のころ体が弱かったんだ。」

「本当か？」

「うん。今はもう大丈夫だけどこの環境だとまた具合悪くしちゃ

いそうなんだよね。」

なるほどと2人は頷いた。

「雄二いいんじゃないか？なかなかおもしろそうだしよ。」

空が口元に笑みを浮かべながら言う。

「お前は戦闘狂かよ。まあいい明久に言われるまでもなく俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思ってた所だ。」

「え、どうして？」

「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」

「????」

「まあいいだろ。先生も戻ってきたし教室に入るぞ。」

そう言うと雄二は教室に入っていく。

「ねえ空。どういう意味？」

「さあ？俺にも分かん。」

空は肩をすくめ、2人は教室に入っていた。

そしてそのまま自己紹介は特に問題なく進んで行き、

「坂本君。キミが自己紹介の最後ですよ。」

「了解。」

雄二の番になり、雄二は教卓に上がった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに呼んでくれ。所で皆に一つ聞きたい。」

そう言つと雄二は視線を巡らせた。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか？」

「……大ありじゃあつ!!!!!!」

Fクラス魂の叫びである。

「だろう？俺だつてこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが……FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

こうして戦争の引き金は引かれた。



### 第3問 戦争の引き金（後書き）

意見感想お待ちしております。

#### 第4問 勝てる要素（前書き）

やっとこさ書きあげました。本当に時間かかる。仕事が忙しすぎます。

では駄文ですがどうぞ！

#### 第4問 勝てる要素

「勝てるわけがない。」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ。」

「姫路さんがいれば何もいらない。」

「なのはさんと付き合いたい。」

「フェイトさんとイチャつきたい。」

「はやてさんとエロ談義したい。」

「アリサさんに蔑まれたい。」

「おい！最後の方全く関係ないことばっかじゃねえか！個人願望だし！」

「アタシそんな趣味持つてませんよ！？」

クラスのところどころから悲鳴が上がる。その中に紛れ込んでいたおかしなものには空とアリサがツッコんでいた。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

「何をバカな事を。」

「できるわけないだろう。」

「何を根拠にそんな事を。」

雄二の宣言に全員がそんな声をあげる。そんな声があがるのも無理はないだろう。実際AクラスとFクラスの戦力の差は歴然だ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争に勝つことのできる要素が揃っている。今からそれを証明してやる。」

そんな雄二の言葉を聞きクラスの中がざわめく。

「おい康太。畳に顔をつけて姫路と高町とハラオウンと八神のスカートを覗いてないで前に来い。」

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわ。（にや！いつに間に！？）（わわわわ。）（ふつ、甘いで土屋君）」

康太は顔に畳の跡を手で隠しながら壇上に立った。

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者だ。」  
ムツッリーニ

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

ムツッリーニ。それは男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を持って呼ばれている。

「ムツッリーニだと・・・・・・・・？」

「馬鹿なヤツがそうだというのか？」

「だが見るあそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして  
いる……」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ。……」

ちなみムツツリとはムツツリスケベって意味なのだが瑞希は分からないのか頭に????を浮かべていた。

「姫路の事は説明することもないだろう。皆だってその力をよく  
知っているはずだ。」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している。」

確かにそうである。彼女は学年2位の實力だ。戦争でこれほど頼  
りになる戦力はないだろう。

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった。」

「彼女ならAクラスに引けをとらない。」

「彼女さえいれば何もいらない。」

「おい！最後のヤツまったつく関係ねえだろ！いいかげんにしろ  
！」

瑞樹へのラブコールに空がツッコむ。

「木下秀吉だっている。」

「うんむ？わしかの？わしよりも空の方が頼りになるぞ。何と言ってもAクラスに入れる実力じゃからな。」

「何だつて？」

「本当なのか？青葉。」

「おう」

周囲の質問に空は特に謙遜も何もせずに言い放った。

「それにハラオウンもいる。こいつもAクラス入りの実力だからな。」

「そうだ。フェイトさんもいた。」

「フェイトさんと付き合いたい。」

「ちょっと待ってください！また関係無いの混ざりましたよ！」

「こんどはアリサがツツコむ。どうやらこの2人はボケにどうしても反応してしまうらしい。」

「おゝゝいアリサもAクラス並みの実力だぜゝゝ」

「ちょっ！コウタ！」

「本当か！？」

「当然俺も全力を尽くす。」

「坂本って小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか。」

「実力はAクラスレベルが5人もいるってことだよな！」

教室内の士気は確実に上がっていったが、

「それに吉井明久だっている。」

その一声でクラス内の士気は一気に下がった。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

「誰だ吉井明久って。」

「聞いたことないぞ。」

「ホラ！折角上がりかけていた士気に陰りが見えてるし！……って、なんでみんな僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないよね！？」

「知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きはく観察処分者だ。」

「……………それってバカの代名詞じゃなかったか？」

クラスの誰かが致命的な台詞を言った。

「ちっ、違うよ！ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で。」

「そうだバカの代名詞……………ちよつとまで高町にハラオウンに八神。そんな目で俺を睨むな。話はまだ終わってないから。」

雄二がバカの代名詞と言った瞬間3人は殺気を込めて睨みつけていた。

「さて続きはと言うのは明久は実質的にFクラスの2番目の戦力だということだ。」

「何!？」

「それはということだ!？」

クラスの中からそんな驚きの声があがる。

「説明するとだな、観察処分者の召喚獣は物理干渉が出来る。そのかわりにフィードバックで召喚獣が受けたダメージや疲れが本人にもいくらか反映される。」

「おいおい。それっておいそれと召喚できないんじゃないか？」



「そうかもしれん。だが利点もある。明久はたびたび教師の雑用に駆り出されて召喚獣を使っている。おかげで扱いに慣れているんだ。だから俺たちは大雑把な攻撃や回避しかできないが明久は体をずらしての回避や相手の攻撃に合わせてのカウンターとかができるんだ。」

「おお・・・」

「それはかなり有利になるんじゃないか？」

「そういうことだ。とにかく、俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。皆この境遇は大いに不満だろう？」

「当然だ！」

「ならば全員筆<sup>ペン</sup>を執れ！出陣の準備だ！」

「おおーーーー！！！」

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！システムディスクだ！」

「うおおーーーー！！！」

「お、お・・・・・・」

「へへ、どうなるのかな。」

クラスメイトの勢いに瑞希は完全に吞まれ、コウタは楽しそうな顔をしている。

何はともあれ彼らの戦いは始まった。

#### 第4問 勝てる要素（後書き）

説明が難しすぎます。文才が欲しいです。ではまた次回！

## 第5問 最強のクラス（前書き）

結構早めに投稿できました。

そして今までで一番長いです。

ではどうぞ！

## 第5問 最強のクラス

「明久。Dクラスの宣戦布告の使者になってこい。無事大役をはたせ。」

「……下位クラスの使者は大抵ひどい目にあうはずだね。」

「いやお前の場合それはない。むしろDクラスの連中がひどい目に合う気しない。」

「うーん、まあいつか。分かったよ。それじゃあ行ってくる。」

そう言う明久は教室を出て行った。

「なあなあ坂本。吉井って強いのか？」

いまのやりとりを聞いたコウタが聞くと、

「ああ、そうだ。前に一度本気で喧嘩した事があったんだが俺と互角にやりあったからなあ。」

雄二は遠い目をしながら言った。

「当然だよ。アキ君は私の家の道場に通ってたんだから強いに決まってるじゃん。」

なのはが自分の事のように胸を張る。

「ちなみに私たちもアキ君の付き添いで顔を出している内に少しやってね、アキ君程じゃないにしろ強いよ。」

「そのとおりや………所で坂本君はまたアキ君を………」

「いやまて！確かに俺は明久を指名したが最終的にあいつ本人が行ったぞ！」

「関係あらへん。さっきの件も含めてOHANASSIを「ただいま」あ、おかえりや、アキ君。」

雄二にはやてがOHANASSIしようとした所で明久が帰って来てはやてはそちに気がそれた。

（助かったー！しかしこのままではちょっとした拍子にOHANASSIされちまう。なんとかしないと。）

雄二がそんなことを考えている中なのは達は明久のほうに駆け寄った。

「大丈夫アキ君？どこかけがとしてない？」

「ああ、うん。大丈夫だよ。」

「にしても早かったね。攻撃されなかったの？」

フェイトが聞くと明久はいくらかバツが悪そうに鼻を掻いた。

「いやそれが、宣戦布告と同時に一人攻撃してきたんだけどその人に思いつきり回し蹴りぶち込んで。それでその人が机をまきこみながら吹っ飛んで行ったの見て他の人達はあっさり受けてくれたんだ。あの人には悪いことしちゃったなあ……」

その言葉に教室の中全員（なのは、フェイト、はやて、空をのぞく）が戦慄を覚えた。

「さて、それじゃあ今からミーティングを行っぞ。」

そう言つと雄二は教室の外に出て行った。どうやら別の場所で行うらしい。

その後を空とコウタと秀吉とアリサ瑞希となのはとフェイトと美波と続く。

「……………（サスサス）」

さらに頬の辺りをさすりながら康太が続く。

「ムツツリーニ。覗いていた時の畳の後なら消えてるよ?」

「……………!!（ブンブン）」

明久の指摘に康太は勢いよく首を振った。

「いや、今否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるから。」

「……………!!（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思う。」

「……………!! (ブンブン)」

「ちなみに何色だった？」

「みずいろに白に黒……………そしてスパッツだった。」

最後の方はくやしそうに康太は言った。

「スパッツははやてだね。まあ、彼女もムツリニ並にエロだから考えが読まれてたんだね。それじゃあ行こうか。」

そう言うつ明久は教室を出てそれに康太も続いた。

メンバーは屋上に集合していた。

雲一つない空から眩しい光が差し込む。春風で瑞希のスカートがはためきそれを康太は注視している。それを見たアリサは小声で「ドン引きです。」と呟いた。

「明久。宣戦布告はしてきたな。」

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど。」



雄二がフェンスの前の段差に腰を下ろし明久達はおのおの腰を下ろした。

「それじゃあその前にお昼ですね。」

「そうだね。アキ君、お弁当作って来てくれた？」

「もちろんだよなのは。そういうそっちは？」

「忘れてないって。大丈夫。」

明久となのはがそんなやりとりをしていると、

「なのは！いつの間にお弁当交換の約束してたの！？」

「ずるいわ！私もアキ君のお弁当食べたかったのに始業式やから次の日の楽しみに我慢したのに！」

フエイトとはやてがそれぞれ大声を上げた。

「ちよつと吉井！どういう・・・まってなのはさん。頸動脈から手を放して。」

「その前にアキ君に襲いかかろうとしないでね。」

明久に襲いかかろうとした美波は即座になのはによって頸動脈を掌握されていた。その後引き下がったのでなのはも手を放す。

「？？ということだ？」

お弁当の件を不思議に思ったのかコウタが聞いてきた。

「ああ、僕は普段は自分で自分のお弁当作ってるんだけどときどき約束した人2人が互いの分のお弁当を作ってくるんだよ。」

「ほう、それはおもしろそうじゃな。空、わしらもやってみんか？」

「ん？ん？ん？ん？ん？、まあそうだな。お前らの料理の腕前の確認もかねてやるか。」

空の言葉に秀吉はお手柔らかに、と苦笑していた。

「本当か明久？お前一時塩と水と砂糖で生活しなかったか？」

「本当ですか？よく生きて来れましたね。」

その事実にはアリサがあきれたような声を出す。

「あ~~~~まあ、そうなんだけど・・・・・・3人にOHAN ASIされちゃったからね。」

明久が遠い目で空を見上げると全員が心から同情した。幼馴染3人はその時の事を思い出しやりすぎたかなあと思った。

「あ、あの、良かったら私もお弁当作ってきましようか？」

「」「え？」「」

いままで黙っていた瑞希が突然そんなことを言ってきた。

「え？本当姫路さん。」

「はい。ご迷惑でなければ。」

「やった！お昼のメニューが増えた！」

明久はガッツポーズを小さくガッツポーズしている。それをなのはとフェイトは複雑そうな顔で見ている。

「……ふーん。瑞希って随分優しいのね。吉井にだけ作ってくるなんて。」

「あ、いえ皆さんにも……」

美波がおもそろくなさそうに言つと瑞樹はそんなことを言った。

「俺たちもいいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら。」

「そんじゃあお言葉に甘えるか。」

「そうですね。断るのも悪いですし。」

アリサの言葉に全員が頷いた。

「分かりました。それじゃあみんなに作ってきますね。」

こうしてその場にいた全員に死亡フラグが立ったがそれはまた別の話。

「なあなあ話が結構それてるような気がしてんだけどさあ。俺たちもともと試召戦争の話するためにきたんだろ。」

コウタが頭の後ろで腕を組みながら言うと全員が話を思い出した。

「雄二。一つ気になってたんじやがどうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし勝負に出るならAクラスじゃろう。」

「そういえばそうだね。」

「まあな。当然考えがあつてのことだ。色々理由はあるんだがとりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ。」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

明久が訳が分からないというように聞く。

「明久。自分の周りの面子をよく見てみる。」

「え〜と……………」

明久はグルリと自分の周りの顔を見て、

「うん。幼なじみが3人に美少女が3人にバカが3人にムツツリが1人にツツコミが1人いるね。」

と結論づけた。

「誰が美少女だと!？」

「いやまて! 雄二が美少女に反応っておかしいだろ!？」

「……………(ぼっ)」

「おい————! 土屋まで反応しやがった! っていうかツツコミ  
って俺か!? 俺の事なのか!？」

これだけの量のボケを一人でズバズバとさばく空はツツコミの名  
に恥じないであろう。

「気を取り直して。まあ、要するにだ。姫路に空にハラウンに  
アミエーラに問題がない以上まともにやりあってもEクラスには勝  
てる。」

「なるほどね。少しでも手強い相手と戦って勝って士気を上げよ  
うってわけだね。」

「そういうことだ高町。話が早くて助かる。それに打倒Aクラス  
に必要なプロセスだ。」

雄二が腕を組んで説明した。

「でもそれってDクラスに勝てないと話にすらなりませんよね。」

「そんなことはないさ。」

アリサの心配を雄二は笑い飛ばした。

「お前たちが協力してくれるなら勝てる。ウチのクラスは――  
――最強だ。」

その言葉に全員が笑みを浮かべた。

「いいわね。おもしろそうじゃない!」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかのう。」

「……………(グッ)」

「が、頑張ります。」

「よっしゃー!ーんじゃあやるかあ!」

「全力全開で行くよ!」

「私も思いつきやるからね。」

「暴れるでえー!」

「よし。それじゃあ作戦を説明する。」

そう言つて雄二は勝利のための作戦を説明し始めた。その中で明久は、

「それにしてもまさかこんなに早く勝負できるかもしれないなん

てね。・・・絶対Aクラス戦まで負ける事はできない。」

と小さく呟いていた。

## 第5問 最強のクラス（後書き）

明日からはゴッドイーターの方に集中しようと思うのでまた更新は遅れます。

ああ〜明日から夜勤ですよ。昼夜逆転ですよ。ツライですよ〜。

でも頑張りたいと思います。では！



**第6問 Dクラス戦パート1（前書き）**

はい、今回はDクラス戦第一回目です。

今回はコウタが頑張ります。

ではどうぞ！

## 第6問 Dクラス戦パート1

「藤木！木下達が渡り廊下でDクラスの連中と交戦状態に入ったわよ！」

こちらに走ってくる美波を見てなんか女らしさがたりないよなあとコウタは思った。彼から見ても美波はかわいい方だと思うし足も長くスタイルがいい。

なんだろうと考え、

「あ、そうか。胸が無いんだ。」

「アンタの指を折るわ。小指から順番に全部きれいに。」

「うわ！ごめん！いやすいませんでした！」

コウタはまるで土下座をするかのような勢いで謝る。

今戦闘を行っているのは秀吉が率いている先攻部隊だ。コウタと美波は中堅部隊にいる。

どういう状況が確認しようとコウタが耳を澄ますと、

「さあ来い！この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！補修室だけは嫌だ！」

「黙れ！捕虜はこの戦闘が終わるまで補修室で特別講義だ！終戦



コウタの激励と共に中堅部隊の全員が突撃した。

すると前から誰かがこちらに走ってくる。

先攻部隊を率いていた秀吉だ。

「おう秀吉。大丈夫か？」

「うむ。戦戦死は免れておるが点数はかなり厳しいところまで削られてしまった。召喚獣ももうへ口へ口じゃ。」

「おっしや。ここは俺たちに任せてテスト受けなおして来いよ。」

「そうじゃな。全教科受けてる時間はなさそうじゃが、一、二教科でも受けてくるとしよう。」

そう言つと秀吉は教室に向かって走り出した。その後を先攻部隊の生き残りが続いていく。

そして入れ替わりにコウタたちが前に出る。

「げ、あいつら五十嵐先生に布施先生連れてやがる。科学で一気にけりつける気かよ。」

コウタは思わず顔をしかめる。

今回は学年主任を立ち合いに総合科目で勝負してたのだがこれでは時間がかかる。Dクラスは短期勝負に移行したようだ。

「なあ、島田。お前化学は？」

「全くダメ。60点台常連よ。」

「俺は今回50点台だ。こうなったら五十嵐先生と布施先生を避けて学年主任の所に行くぞ。」

「了解！」

行動しようとした瞬間。

「あ、そこにいるのはもしかや美波お姉さま！五十嵐先生、こっちに来てください！」

「くっ！ぬかったわ！」

螺旋状のツインテールの女子生徒がこっちに走ってきた。しかも相手はすでに召喚獣を呼び出している。

「ちょ、藤木助けて！」

「ああ、もうしょうがねえなあ！試獣召喚っ（サモン）！」

美波の前にコウタが躍り出るとそのまま召喚する。

幾何学的な魔法陣から出てきたのは露出の多い服に短パン、そして巨大な重火器を持ったコウタをデフォルメしたような姿の召喚獣だ。

Fクラス 藤木コウタ

VS

Dクラス 清水美春

科学54点

VS

94点

「おっしゃあ！初陣だ！いっちょ派手に……………」

コウタが奮起しいざ戦おうとすると、

「殺します…………美春とお姉さまの邪魔する人は全員殺します……………」

美春の凄まじい殺気に青ざめると美波を振り返り、

「交代しない？」

と提案した。

「いや！絶対いや！」

ものの見事に拒否られてしまった。

「ちくしょう！やってやる！死にもの狂いじゃコラア！」

そう言つとコウタの召喚獣は重火器―神機を乱射した。

「くっ！近づけな…………きゃあ!？」

乱射した弾は美春の召喚獣をうまい具合に足止めし、そして弾が足に当たり体制が崩れた。

「ナイスよ藤木！試獣召喚っ（サモン）！」

そこに美波が召喚獣を召喚する。

青い軍服にサーベルの美波の召喚獣はそのまま美春の召喚獣を切り倒した。

「おいなんだよ！いいところ取りじゃねえか！ふざけんなよ！」

「うっさいわね！細かいこと気にしないでよ！」

などと2人がぎゃいぎゃい口論していると、

「殺します……豚野郎は殺します殺しますコロコロコロコロ……」

美春が精神崩壊を起こした。

「ちよっ！美春！？」

「怖ええええええ！！鉄人！補修室一丁！」

コウタが悲鳴じみた声で叫ぶと、

「西村先生と呼ばんかバカ者！おお、清水か。勉強漬けにしてやるからこっちに来い。」

そう言うつと西村先生は美春を軽々と担ぎ上げた。

「お、お姉さま！美春は諦めませんか！このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいね！」

かなり危険なセリフを残しながら美春は補修室に連行された。

「島田・・・・・・・・お前厄介なヤツに目付けられてるな。」

「まあね・・・・・・・・」

コウタの隣で美波ははあ、と深いため息を吐いた。



## 第6問 Dクラス戦パート1（後書き）

最近気づいたことです……俺意外と書くスピードが早い。

動画見るの少なくとも1週間無理でも2週間に1回はいけるかもしれません。

ではまた！

## 第7問 Dクラス戦パート2（前書き）

今回は明久が活躍します。他のみんなは・・・・・・・・次で活躍させます。

ではどうぞ！

## 第7問 Dクラス戦パート2

渡り廊下でコウタ達Fクラスの面子はどうにかこうにか戦っていた。

というのも、

「うわ、あぶね！おい藤木！ちゃんと狙え！」

「しかたねえだろ！まだ召喚獣の扱いに馴れてねえんだよ！」

後方から援護をしているコウタは正確な狙いをつけて撃つということがまだうまく出来ない。だから何度か誤射をしそうになっている。そのせいでうまく戦えていないのだ。

まあ、その乱射されている弾のおかげでDクラスの連中もうまく戦えてないのだが。

「藤木！助けてくれ！」

コウタが目を向けると、一人の生徒がやられかけている。

「ちっ！誤射しても怒るなよ！」

コウタはできるかぎり早く狙いを定めると、引き金を引いた。

弾は相手の召喚獣の頭部をうまく撃ち抜き、戦死にした。

「助かったぜ！藤木。」

「気をつけるよ。こんどわよ。」

「ああ……藤木！後ろ！」

その声にコウタが後ろを向くと、一人が切りかかってきている。

「くそ！」

コウタは撃ち抜こうと引き金を引くが、

「弾切れ！？」

銃口からは弾はでず、カチカチとむなしい音が響くだけだった。

「もらったぜ、藤木コウタ！」

相手の刃はもう目の前まで来ていた。

「くそ！ここまでかよ！」

コウタが目を閉じた瞬間、

「試<sup>サモン</sup>獣召喚！」

その声と共に一体の召喚獣が相手の召喚獣を吹き飛ばした。

コウタが目を開くと、

「もつとしっかりしてよ、隊長さん。」

苦笑している明久がいた。

「明久！もう補充試験終わったのか？」

「いや、全部は終わってないよ。僕だけ早めに切り上げて援軍に来たんだ。なのは達は後から来るよ。それよりも早くリロードを。」

「おう。すまねえな。」

そう言つとコウタの召喚獣はリロードを始めた。

「ちつ、させるな！藤木の護衛は一人だけだ！二人まとめてやりちまえ！」

その声と共にDクラスの二人が明久達向かつて突つ込み、最初の一人が剣を振り下ろしてきたが、

「そんな単調なの当たんないよ。」

明久の召喚獣は懷に飛び込むと同時に木刀を突出し、相手の首に叩きつけ、吹き飛ばす。

更にもう一人の顎を素早く木刀でかち上げるとがら空きの胴を思いつき薙ぎ払い、吹っ飛ばす。

「な、何でだ！？何でこっちが一方的にやられてんだ！？」

「マグレだ！点数じゃこっちが勝ってた。一気にやっちまえ！」

そして更にDクラスの生徒が突っ込んできたが、

「させるかよ!」

リロードを終えたコウタの召喚獣が神機を乱射。弾幕で相手を足止めする。

明久はとっさに召喚獣をかがませて何とか回避する。

「ちょっとコウタ! 撃つならもつと早く言つてよ! 危なかったからね!」

「わりい、わりい。でも避けれてんじゃん。だったら良いじゃん。」

コウタはからからと笑いながら手を動かす。

「たくつ……よし! 行くよ!」

「おう!」

明久が突撃しようとした瞬間、

ピンポンパンポーン 連絡いたします

校内放送が突然流れてきた。

「この声って……横溝君?」

「そう言えばあいつちょっと前に教室に戻ってたなあ。」

二人が首をひねっていると、

船越先生、船越先生。須川君が体育館裏で待っています。

「・・・・・・・・・・はい？」

生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうです。

「わああ・・・・・・・・」

二人は思わず感嘆の声を漏らした。

船越女史とは40歳をすぎてもなお独身であり、最近では単位を盾に生徒たちに交際を迫っている。その事から文月学園の男子生徒共通の要注意人物である。

「須川・・・・・・・・アンタあ男だよ！」

「ああ、感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」

この場にいない須川に部隊の面子が感動にむせんでいる。なかには敬礼している人もいる。

どこからか「坂本・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」などという声が聞こえてきたが。

「まあ、いいや。コウタ改めていくよ！」

「おしゃあ！任せとけ！」

その声と共に明久の召喚獣は一気に先ほどの放送に気を取られていたDクラスの生徒一人を木刀で殴りつけ、一気にふつとばす。

「しまー」

「いまよ！集中攻撃！」

「「「おおおおおお！！！！」」」

明久の攻撃でふつとんだ召喚獣を美波の号令でFクラスの面子がタコ殴りにする。

「よし。」

「油断したな！吉井！」

明久の召喚獣の後ろから別の召喚獣が切りかかってきたが、それを軽くよける。

そして攻撃が空ぶった召喚獣にコウタ召喚獣は狙いをつけ、引き金を引く。

弾は見事に相手の胴体を撃ち抜き、仕留める。

「やったね。」

「おうよ。」



明久とコウタはそう言うとお互い腕をぶつけ合う。

「よし、この勢いを維持するよ！全員突撃！」

「」「」おおおおお！！！！」「」

明久の号令と共にFクラスは更に攻め込む。

## 第7問 Dクラス戦パート2（後書き）

次でDクラス戦は終了させる予定です。

そろそろバカテストもやろっかなあと考えています。

ではまた次回！

## 第8問 Dクラス戦パート3（前書き）

結構早めに投稿できました。

今後もこのスピードをできるかぎり維持したいです。

## 第8問 Dクラス戦パート3

「アキ君！大丈夫！？」

「もうちょっと耐えて！すぐに行くから！」

「もう少しだけ持ちこたえろよ！」

渡り廊下でDクラスと戦っている明久達の後ろから援軍の雄二達の声が響いてきた。

しかし距離はまだあり、合流には時間がかかりそうだった。おまけに相手をかなり倒したとはいえ明久たちの部隊も結構減らされている。最初は18人だったのがいまの人数は5人。

「援軍だ！合流される前に吉井たちを全滅させるんだ！」

「くそ！このままじゃヤバイぞ、明久！」

コウタが焦りながら言う。

「コウタ。弾はどれくらいあるの？」

「そろそろリロードしたいな。」

「分かった。島田さん、コウタの護衛お願い。コウタは僕が隙を作るからその時にリロードを。」

「分かったわ。」

「おっしゃ、まかせとけ。」

そう言うとき明久は前へ出た。

「吉井が一人で出ているぞ！やっちまえ！」

前に出てきた明久を仕留めようと相手が襲いかかってきたが、

「よいしょ！」

明久は召喚獣を低い姿勢にし、そのまま横っ飛びさせ、更に素通りする相手の召喚獣足をすくい転ばせる。

「（よし！ここだ！）ああっ！霧島さんのスカートが捲れている！」

「「「なにいつ!?」」」

明久がDクラスの背後を指差して叫ぶとDクラスの男子だけでなく、Fクラスの男子やDクラスの女子までも振り返った。

「よし！コウタ今のうちに……」

明久が振り返って見るとコウタはリロードをせず……Dクラスの後ろを見ていた。

「コウター……!!!何で君まで反応してんのさ！意味ないじゃん！」

「いや仕方がねえだろ！いきなりそんな事言われたら反応するのが男だろ！真相知ってるお前は抜いてもよ！」

「言い訳だ！ていうかそんな事よりも早くリロードしてよ！」

本体同士がそんな口論をしながらもコウタの召喚獣はリロードを始めた。

「おい！藤木がりロードをしているぞ！早く倒しちまうぞ！」

コウタの行動に気づいたDクラスの生徒達はコウタを倒そうと一斉に襲いかかってきたが、

「させないよ！」

明久が先頭の召喚獣を思いっきり木刀で殴り飛ばすと後ろの他の相手にぶつかり、そのまま連鎖的に相手が倒れて行った。

「島田さん！」

「まかせといて！」

そして倒れた相手に美波が斬りかかり、一人を仕留める。

「みんなも行つて！ここであつこいところ見せればなのは達に褒められるかもしれないよ！」

明久の言葉にFクラスの生徒は、

「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

「！！！！！！」

一瞬で士気がゲージをぶっちぎり、凄まじい勢いでDクラスに襲いかかる。

「うわあ・・・自分で言っというてなんだけど凄いことになった。」

「そうね・・・」

その光景に明久と美波はそろって呆然と見ていた。

が、勢いは凄いのだがいかんせん点数に差があるため、

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川がやられたぞ！」

劣勢である。

そこに、

「おまたせ！アキ君！試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

「よしやあいくで！試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

「よし！リロードが終わったぜ！」

合流した援軍とリロードを終えたコウタが参戦した。

「くっ！ここは退くぞ全員遅れるなよ！」

「させないよ！」

撤退しようとしたDクラスの召喚獣になのはが光球を叩きつける。

「絶対に逃がすな！ここで一気に決めるよ！」

明久の号令に全員が攻めこもとした瞬間、

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

Dクラス代表ー平賀源治率いるDクラス本隊が援軍に来た。

「Dクラス本隊だ！予想以上に早く動いたな。」

それもそうだろう。明久達の部隊は損傷を受けたが、明久とコウタのコンビで相手の戦力をかなり減らした。

「本体の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

「「「おおー！」」」

平賀の号令にDクラス本隊のメンバーは動いたが、

「「「させない（で）（ぜ）――！」」」



遠距離攻撃ができるなのは、はやて、コウタの3人が弾幕を張り、Dクラスメンバーの動きを封じる。

さらに相手が動いたおかげで平賀への道が開けている。

「チャンス！」

明久はそこを見逃さず駆け出す。

「向井先生！Fクラス吉井明久が」

「Dクラス玉野美紀、サモン試獣召喚」

「な、近衛部隊！？」

勝負を仕掛けようとした明久の前に玉野が立ちふさがった。

「残念だったな、吉井明久君。」

平賀は勝ち誇った笑みを浮かべている。それを明久は忌々しげに見ていたが、ふっと片目を瞑った。

「そうだね。たぶんこのままじゃあ僕は君を倒せない。だから」

もったいぶった後、

「姫路さん、とどめよろしくね。」

「は？」

平賀が何を言ってるんだ、というような顔をしていると、

「あ、あの・・・」

その後ろから瑞希が申し訳なさそうに肩を叩いた。

「え？姫路さんどうしたの？他のクラスはまだ自習の時間だけど。」

「

「いえ、そうじゃなくて・・・Fクラス姫路瑞希、Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます。」

「はあ、どうも。」

「あの、えっと・・・さ、試<sup>サモン</sup>獣召喚です。」

そのまま平賀も召喚獣を召喚、構えるが、そのまま瑞希の召喚獣の大剣の餌食となった。

そしてDクラス戦の決着が付いた。

## 第8問 Dクラス戦パート3（後書き）

リリカル側の召喚獣の攻撃は基本は光球を撃ち出す形になります。  
数は自由ですが。

ではまた次回！

## 第9問 Dクラス戦後（前書き）

今回はちょっと時間がかかりました。

戦後対談です。いろいろ伏線があるかもしれません。

ではどうぞ！

## 第9問 Dクラス戦後

Dクラス代表 平賀源二 討死

「うおおおーーーーー!!!!!!」

その報せが届いた瞬間Fクラスからは勝鬨の聲が、Dクラスからは悲鳴が上がった。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで置や卓袱台とはおさらばだな！」

「坂本雄二サマサマだな！」

「ああ。やっぱりあいつは凄い奴だったんだな！」

「藤木に吉井もやってくれたよな！」

「姫路さん愛しています！」

「高町さん付き合ってください！」

「何かどさくさに紛れて告白が聞こえてきたけど!? 断ります！」

「ガーーーーーン!!」

何やら関係ないのが聞こえてきてるが、代表の雄二や功労者の明久とコウタを褒め称える声が聞こえてきている。

「あー、まあ、そのなんだ。そう手放しでほめられると、なんつか。」

みんなから褒められて雄二は明後日の方を見ながら照れていた。

「だろだろ！？これが俺の本当の実力だぜ！」

「コウタ……ちょっとは謙虚になりなよ。」

それに反し、コウタは胸を張って鼻を天狗にしており、明久は若干あきれていた。

「まさか姫路さんがFクラスだったなんて……信じられん。」

その声に明久が振り向くとDクラス代表の平賀源二がヨタヨタと歩いてきた。

「あ、その、さつきはすいません……」

別の方向から瑞希が駆け寄ってきて源二に頭を下げる。

本来なら謝る必要はないのが、それでも瑞希は頭を下げる。

「いや、謝ることは無い全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。今日は時間がないから明日でいいか？」

これで彼は今後最低3ヶ月は最低のFクラスでクラスメイトに恨

まれながら過ごす羽目になる。が、

「いや、その必要はない。」

雄二はその懸念を払拭した。

「何？」

「Dクラスの設備を奪うつもりは無いからだ。」

雄二の言葉に全員が目を丸くした。

「みんな、忘れたか？俺たちの目標はあくまでもAクラスだ。だからDクラスの設備には手を出さない。」

「それはありがたいが……いいのか？」

「もちろん条件がある。俺が指示したら窓の外のあれを動かなくしてもらいたいんだ。」

そう言って雄二が指差したのはBクラスのエアコンの室外機だった。

「あれか。」

「設備を壊すから教師に睨まれるだろうが悪い取引じゃないだろう？」

まあ、そうだろう。うまくやれば嚴重注意だけですむのだから。

「分かった。その提案を吞もう。」

「そうか。タイミングは後で話す。今日はもう帰っていいぞ。」  
交渉は成立した。

「ああ。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ。」

「はは、無理するな。勝てっこないと思ってるんだろ？」

「はは、そうだ。FクラスがAクラスに勝てるわけがない。アイツが居るからな。ま、社交辞令だ。」

そう言つと源二は去つて行つた。

「アイツ？誰の事だ？」

雄二はあいつと言う存在が気になったが分からないので頭の隅に追いやつた。

「さて、みんな！今日はご苦労だった！明日は今日消費した点数の補充を行うから今日は帰ってゆっくりしてくれ！解散！」

その言葉でみんながワラワラと帰り支度を始めるため教室に戻っていく。

「私たちも帰ろうか。アキ君。」

「そうだね。」



「今日は帰ったらゲームやゲーム。」

明久たちも帰り支度を始めるために教室に戻っていった。

「明日は………補充試験をやって終わりかなあ。」

帰り道。フェイトは明日の予定を想像して呟いた。

「そうかもしれないけど………坂本君の事だから続けてか  
もしれないね。」

なのはが推測を話すがなぜか全員その言葉に納得できた。

「そうか……だったらフェイト。勉強教えてよ。」

「え!？」

明久の申し出にフェイトはすつときよんな声を上げた。

「だったら私も教えてほしいな!うん!」

即座になのはが割って入ってきた。

「あ、それもそうだね。僕だけじゃああれだし、なのはとはやて  
のもお願いできる?」

「う~~~~~~~~、……………うん。」

フェイトはしばらく唸ったがやがて諦めたように頷いた。

「はあ、アキ君はほんま鈍感やな。」

それを見ていたはやてはやれやれとため息を吐いた。

「それじゃあ……てありゃ？」

明久はここで鞆が妙に軽いことに気づき、中身をあさって声を上げた。

「しまった。教科書教室に置いてきちゃった。」

「ほんと？私の貸してあげようか？」

「いや、それはなのはに悪いよ。今から取りに行ってくる。先に帰ってて。」

「うん、分かった。それじゃあ先に行ってるで。」

「薄情だね、わが親友よ。」

「私は甘くはないで」

そして明久は文月学園に走って行った。

ガラッ「ふう、着いた。」

今まで走ってきたのに息一つ乱さず明久はFクラスに戻ってきた。

「よ、吉井君!？」

「あれ？姫路さん？」

もうみんな帰ったと思っていた教室に瑞希がいた。

「どどどどどうしたんですか!？」

「いや、ちょっと……………」

そこで明久は瑞樹が座っている席に目を向けた。そこには可愛らしい便箋と封筒が置いてあった。

(あれって……………  
……………かな?)  
(……………ラブレター……………)

かなり間が空いたが明久はそう結論付けた。

(ふむ……………ここは……………  
……………早めに用を澄まして  
邪魔者は消えた方がいいね。)

「ちよつと教科書を忘れたから取りに來ただけだよ。」

そう言つと明久はさつさと自分の席に向かい教科書を鞆に詰めた。

「ごめんね、驚かせちゃって。」

「あ、いえ別に……。」

「それじゃあ僕はこれで……。」

そう言つと明久は教室を出て行つた。

（それにしても姫路さんには好きな人がいるのか。ここはクラスメイトとして応援した方がいいかな？まあ雄二だったらしないけど。）

そんな事を考えながら明久は廊下を歩いていった。

（それにしても……好きな人か……。）

そこで明久の脳裏に一人の少女の笑顔が映つた。

「っ！／＼／＼……もうちょっと。せめて……  
」  
「クラス並みに勉強できないとね……。」

赤面しながら明久は呟くと早く帰るため走り出した。

## 第9問 Dクラス戦後（後書き）

こんな感じです。次回は・・・・・・・・ついにあれが出てきます。

果たして明久たちの運命は！？

ではまた次回！感想待ってます。

第10問 死の料理（前書き）

ついに・・・・ついにあの料理が・・・

はたして最初の犠牲者は・・・・

ではどうぞ！

## 第10問 死の料理

次の日。明久達Fクラスは午前中に補充試験を終わらせていた。

「うあー……づがれだー」

明久はテストの疲労から机に突っ伏していた。

「うむ、疲れたのう。」

近くに来ていた秀吉が頷きながら答える。

ちなみに今日は髪をポニーテールにしており、より女の子に見える。それを見た空は「本当に男と見てもらいたいのか………」と額に手を当てていた。

「まったくだよな。テストなんて疲れるだけだぜ。」

コウタも首をコキコキと動かしながら答える。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにするかな。」

雄二は疲れなど微塵も感じさせずに立ち上がる。

「あの、どれだけ食べるつもりですか。」

「坂本君はフードファイターでも目指しているの？」

「というよりもすでにフードファイター並のだよな。」

「と言うよりも炭水化物取りすぎや。栄養偏るで。」

上からアリサ、なのは、フェイト、はやての順に雄二の昼食内容にツッコんだ。

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ。」

「それじゃあ混ぜてもらうね。」

「……………（コクコク）」

ムツツリーニが頷いているがおそらく下心があるだろう。

「それじゃあ、秀吉。俺たちは優子の所に行くぜ。弁当の食べさせ合いだ。」

「うむ、そうするかろう。」

そう言つと空と秀吉は包みを持って出て行った。

「それじゃあフェイトにはやて。これ二人の分のお弁当……………」

「

「あ、あの。皆さん……………」

明久が二人のお弁当を取り出そうとしたところで瑞希が声をかけ



ていた。

ちなみに二人は昨日のうちに弁当交換の約束を取り付けていた。

「うん？あ、姫路さん。雄二たちと学食に行くの？」

「あ、いえ。え、えっと……お昼何ですけど、その、昨日の約束の……」

瑞樹はもじもじしながら明久たちを見ている。

「あ、もしかしてお弁当の件ですか？昨日の。」

「は、はい。迷惑じゃなかったらどうぞ。」

そう言うのと体の後ろからバッグを出してきた。

「迷惑じゃないよ。ね、雄二。」

「ああ、そうだな。ありがたい。」

「そうですか？良かったあゝ」

そう言って瑞希はほにやっと笑った。とここで明久ははやてたちを振り返った。

「じゃあ二人はどうする？」

「もちろんついて行くよ。」

「お腹なら大丈夫や。アキ君のお弁当は別腹やからな。」

フェイトはニコツと笑い、はやてはお腹を叩いて笑った。

「・・・・・・・・・・食べ過ぎないようにしないと・・・・・・・・・・」

なのははポツリと小さく呟いているが。

「むー・・・・・・・・・・瑞希って意外と積極的なのね・・・・・・・・・・」

美波は親の仇のように瑞希を睨みつけていた。

「それじゃあせつかくのご馳走だしよお、屋上で食おうぜ。」

「そうだね。」

コウタの提案にみんなが頷いた。

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ。」

「へ？坂本君はどこに行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねな。」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「悪いな。それじゃあ頼む。」

「おっけー」

「そうだ、明久。きちんと俺たちの分を取っておけよ。」

「大丈夫だって。あまり遅いと保証できないけど。」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる。」

そう言うとき雄二と美波は教室を出て、一階の売店に行った。

「僕らも行こうか。」

「そうですね。」

瑞希が持っていたバッグを明久が代わりに担ぐ。

それなりの重さだが鍛えてる明久にはそれほど重くは無い。

そして明久たちは屋上に出た。天気は青空が見える晴れ。絶好のお弁当日和である。

明久たちはシートを用意して準備をした。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

瑞希が重箱のふたを取った。

「……おおっ！！」「」

明久たちが一斉に声を上げた。

中身はエビフライやから揚げ、エビフライにおにぎりにアスパラ

巻など定番メニューが詰まっております、凄くおいしそうに見える。

「それじゃあ雄二には悪いけど先にー」

「・・・・・・・・・・（ヒョイ）」

「おっさきーー」

ムツツリー二とコウタはさっさとエビフライを取ると口にはおり込んだ。

ボタン            ガタガタガタガタ×2

2人そろって豪快に顔面から倒れ小刻みに震えだした。

「「「・・・・・・・・・・」」」

残った明久たちは顔を見合わせた。

「わわっ、土屋君に藤木君!？」

瑞希が慌てて配ろうとした割り箸を落としていた。

「・・・・・・・・・・（ムクリ）」

ムツツリー二が起き上がりグツと親指を立てた。

恐らくすごくおいしかったと伝えたいのだろう。

「あ、お口に合いましたか良かったですう。」



「は？何言ってるのあなた達は？」

優子は二人の言葉の意味が分からず首を傾げた。

「いや、わしらにもよく分からのじゃ・・・」

「まあ、とりあえず飯食おうぜ。」

そう言つと空は優子のお弁当の卵焼きを口に運んだ。

「うん。うまい。うまくなってんじゃん、優子。」

「そうかしら。やっぱり練習したかいがあつたわね。」

「空の料理も相変わらずうまいのお。」

その隣で秀吉が空のお弁当のから揚げをおいしそうに食べていた。

こちらは平和に昼食の時間が流れていた。

## 第10問 死の料理（後書き）

本当は一氣に行きたかったのですが文字数の関係と区切りよく終わったのでここで。

ふと思ったんですが硫酸とか使ったら食材が幾らかは溶けますよね。そこで気付かないのかなあ。

では次回は早めに上げようと思います。

第11問 終焉の笛（前書き）

はい、今回はかなり早く書き上げられました。

やればできるんだなあ。

まあ次回からはまた遅れますけど。

ではどうぞ！



## 第11問 終焉の笛

晴れ渡る空が見える屋上。

だがなぜだろう。屋上の一角はどう見ても曇天の空模様だ。

明久となのはとフェイトとはやてとアリサは顔を見合わせ小声で話していた。

「ねえなのは。あれと思う。？」

「どう考えてもやばいよね。演技にはとてもみえないよ。」

なのはがいまだに動かないコウタに足が震えているムツツリー二を見ながら言った。

「と言うよりもそんな演技をする必要がないよね。」

「アタシ、土屋さんがK O寸前のボクサーが生まれたてのバンビにしか見えません。と言うかコウタは大丈夫なんですか。全然動きませんけど。」

「まさか………シャルさんと同種の人なんか。瑞希ちゃんは。」

はやての言葉に明久、なのは、フェイトは顔を青ざめた。

はやては家が広いのでちょっとした寮として開放している。

家賃は月5万ほど。食事やお風呂はもちろん共同だ。今は3人の大学生が使っている。

そのなかの一人。シャマルと言う女子学生の料理は一口で意識を刈り取るほどの破壊力を秘めている。

現にそれを食べた明久たちは5時間ほどみなして意識を失っていたらしい。（シャマル談）

「で……これからどうします。」

アリサが聞いてきた。

「どうしますって言われても……」

「……よし、ここは僕が行くよ。」

明久が腹をくくった顔で立候補した。

「そんな！危険すぎるよ！」

「そうや！なにもアキ君が行かんでも！」

なのはとはやてが抗議の声を上げた。

「そうは言ってもこの中で一番体が頑丈なのは僕なんだよ？だって僕が……」

と……

「おう、待たせたな。へーこりやうまそうだな。どれどれ？」

雄二が現れそのまま素手で卵焼きを素手で掴み口にほおり込んだ。

「あ、坂本くーーーーー」

パク  
タガタ  
ボタンーガシャンがシャン、ガタガタガタガ

ジュースの缶をぶちまけながらこれまた豪快に顔面からぶっ倒れ、  
痙攣しはじめた。

「さ、坂本！？ちよつと、どうしたの！？」

遅れてやってきた美波が慌てて雄二に駆け寄った。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

明久たちが無言で顔を青ざめながら雄二を見ていると本人が彼ら  
を見て目で訴えてきた。

「毒を盛ったな」と。

「毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ。」

それに対し明久も目で返事をした。

「あ、足が・・・・・・・・・・攣ってな・・・・・・・・・・」

瑞希を傷つけないように嘘をついた雄二だがそれを見たアリサは

顔をしかめた。

「あははは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないかな。」

「そうだね、うん。」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど。」

「いや美波ちゃん。鍛ええても攣るときは攣るもんやで。」

美波の言葉にはやてがそう答える。さてこれからどうするかと事情を知っている4人が考えようとした瞬間、

「それじゃあ瑞希さん。いただきますね。」

アリサが衝撃発言をした。

「あ、はいどうぞ。」

「ちょ、ちょっと待って!」

なのはが慌ててアリサを捕まえた。

「アリサちゃん何言ってるの!?坂本君のとか見てなかったの!」

「見てましたよ。だからほんのちよつとつまむ位で済みますよ。」

なのはの言葉にアリサはすまし顔で答えた。

「で、でもかなり危険じゃあ。」

「そうかもしれません。ですが誰かが行かないといけないならあたしが行きます。素直に感想も言えますしね。」

「素直って……不味いつていうの？」

「当たり前ですよ。」

アリサは当然という風に答えた。

「でも、それって姫路さんが傷ついちゃうんじゃない……」

明久も会話に入ってきた。

「何言ってますか。ここで不味いつて言わないとこれからもあるを作ってくるんですよ？人は傷ついていくことで強くなるんです。」

明久はそう言い切るアリサがとてもカッコよく見えた。

「では………行きます。」

そう言つとアリサはお弁当に向き直つてはしで卵焼きのほんの端っこをつまんだ。

「あれ？アリサちゃん食べる量すくなくないですか？」

「あ、アタシ小食なんで！」

量を不思議に思った瑞希の言葉にアリサは慌てて答えた。

そしてアリサはしばらくじっと卵焼きを見ていたが決心がついたのか口に入れた。

その瞬間、

「!？」

口を押えて後ろの倒れた。

「あ、アリサ!？どうしたのよ!？」

突然倒れたアリサを心配して美波が駆け寄る。

「!、!、!!」

そのまま口を押え、バタバタと足をアリサはばたつかせた。

足が動くたびにスカートが捲れるがアリサはそんなの気にしてられない。ちなみにムツリー二はどこからともなくカメラを取り出し写真に収め、雄二は未だ回復しきれていないので見る余裕なし。明久ははやてが目隠ししていた。胸を当てるといったずらのおまけつき。

そしてしばらくしてアリサの動きが止まり、弱弱しく起き上がった。

「アリサ、大丈夫？」

「な、なんとか大丈夫です。お気遣いありがとうございます。」

アリサは心配してくる美波にお礼を言つと瑞希に向き直った。

「すいませんが瑞希さん。言わせてもらいますが、」

「は、はい。」

「……恐ろしく不味いです。」

アリサの言葉に瑞希はショックを受けた顔をしてうなだれた。

「ありえませんよ。あの量で意識を持ってかれかけるって。いったいどんな材料を使えばあんな味が……」

「……わかりました。」

「はい？」

「これからアリサちゃんに認めてもらえるように毎日お弁当作ってきます！」

「前言撤回。すごくおいしかったです。改良の余地は一切ありません。このままの味を維持してください。」

まさしく前言撤回を表しているさまである。

「あ、そうですか。よかったです。」

そしてあっさりと信じてしまった瑞希嬢。

「「「アリサーーーーー!!」」」

明久たちがアリサに詰め寄る。

「無理です！無理です！あんなの毎日食べさせられたらアタシ死んじゃいます！」

目に涙を貯めてフルフルと首を振るアリサを見て明久たちもこれ以上追及できなかった。

「いや、そもそも瑞希ちゃんこれ何を入れたの!？」

なのはが根本的な事を聞いた。

「あ、はい。卵焼きにひと工夫入れたいなあと思ひまして……」

「

「思ひまして……」

「硫酸を入れたぐらいです。」

次の瞬間どこからかブツ！と何かが飛ぶ音がした。

「なあ、瑞希ちゃん……ちょっとこっち来てくれへん。」

はやてがゆらりと立ち上がって手招きした。



「？、はい。」

それに素直に従い瑞希ははやてについて行った。

そして2人はそのまま屋上のドアのある部分の裏に消えて行った。

「はやてちゃん。どう考えてもOHANASHIする気だよね。」

「うん。そうだね。」

「まあ、今回は瑞希の自業自得……」

次の瞬間、

「響け！終焉の笛！ラグナロク！！」

「きゃあああああああああああ！！」

極太の閃光が空に向かって伸びた。

「「「！？」」」

その場にいた意識があるもの全員が思わずギョッ！とした。

「硫酸てなんや硫酸て！あんた料理舐めとんのか！ええ！？コラ  
！」

半ばヤンキー口調になりかけているはやての怒声が聞こえてきた。

それを聞いた全員が決心した。

なにがあってもはやてだけは本気で怒らせまいと。

## 第11問 終焉の笛（後書き）

さて今回はゴッдойターの執筆にかかりますので遅れます。

でもできるかぎり早くするように努力はします。

では次回！

## 第12問 次のプロセスと新コンビ

「そういえばよお雄」。次の目標。」

「ん？試召戦争の事か？」

「おう。」

地獄の昼食を乗り越え、明久たちは今お茶をすすっている。ちなみに意識を取り戻したコウタはがぶ飲みしまくっている。お茶には殺菌作用があるらしいので。硫酸の前には意味ないだろうが。

ちなみにあの後はやては意識を失った瑞希の首根っこをつかんで引きずりながら戻ってきてみんなに恐怖を覚えさせた。

その瑞希も今は意識を取り戻しているが。

ちなみにお昼は明久たち4人のをみんなで分ける結果になった。

「相手はBクラスか？」

「ああ。そうだ。」

「どうしてBクラスなの？僕らの目標はAクラスでしょ？」

明久たちの目標はAクラスだ。だからこそその疑問だろう。

「正直に言おう。どんな作戦でもAクラスには勝てやしない。」

雄二は神妙な面持ちで言う。

「え？なんで？こつちにはフェイトやアミエーラさんに空、何より姫路さんがいるんだよ？」

「いや、アキ君。いくら私でもAクラス、それも上位の人相手だと厳しいよ。」

「アタシもです。そもそも、Fクラスの他の戦力の人たちの事を考えるとAクラスの大半をアタシたちで相手することになりますよ。」

アリサの言葉に明久はあ、そうか。というふうな顔をした。

「それじゃあウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや。そんなことはない。Aクラスをやる。」

「雄二、さつきと言ってることが違うじゃないか。……まあ、そうならないと困るけどね。」

美波の質問に雄二は答え、その答えに明久が間に入る。しかしその後の言葉は誰の耳にも入らなかった。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ。」

「え、一騎打ち？」

その言葉に明久は少し驚いた顔になった。そしてその顔には何か

別の感情が入っているように見える。誰も気づいていないが。

「一騎討ちに？どうやってだ？」

「Bクラスを使う。」

「Bクラスを………ですか？」

「アミエーラ、試召戦争で下位クラスに負けた場合の設備はどうなるか知っているな。」

「はい。下位クラスは負けたら設備ランクを一つ落とされるんですよ。」

「ああ。では上位クラスが負けた場合は？」

「確か相手クラスと設備を入れ替えさせられるんですよ。」

「ああ、そのシステムを利用して交渉する。」

「交渉？」

「Bクラスをやったら設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだがAクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。必ずうまくいくだろう。」

「ん、それでどうするんや。」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に

攻め込むぞ』と言った具合にな。」

「なるほどね。」

さすがのAクラスといえども学年2番目のBクラス戦後、休む間もなく戦争ではきついだろう。

更にFクラスは今の設備にたいし不満を持っているためモチベーションは高い。しかしAクラスは勝っても何も得られないためモチベーションは低い。

そのことは明久も分かっていた。しかし彼にしか分かっていないことがある。

確かにAクラス全体のモチベーションは低いだろう。たった一人を除いては。

「でもよお。Aクラスは確実に勝つために全体の戦争をやつてくる確率が高いぜ。それにー」

「それに？」

「そもそも一騎討ちにで勝てんのか？姫路がこっちにいることはばれてるからよう。」

Dクラス戦のことで瑞希がFクラスにいることはすでに周知の事実だろう。ならばAクラスは必ず瑞希対策を練ってくる。

「そのへんには考えがある。心配するな。」

みんなが抱いている不安とは対照的に雄二は自信満々だった。」

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後だ。で、あ、待ってください。坂本さん。」ん、なんだアミエーラ。」

雄二の言葉を遮りアリサが入ってきた。

「Bクラス戦なんですけど……アタシを明久さんと組ませてください。」

「「「はあ？」」」

アリサの言葉に一同目を丸くした。

「どうしてなの？アリサちゃん。」

なのはが聞く。そして美波と瑞希が軽く殺気を出しながら明久を睨んでいる。下手な答えは即彼の死につながる確率大だ。

「はい。アタシ、点数は良い方なんですけど、操作の方が少し苦手なんです。ですから明久さんに教えてもらおうと。教えることができますなくてもうまい人のをまじかで見て練習をしたいんです。」

アリサの言葉にみんなが納得したように頷いた。

「だそうだけど、どうするの？アキ君。」

フェイトが明久に向き直って聞く。ちなみにあの二人ははやてとなのはが牽制している。



「そういうことだったらいいよ。役立つかどうかは分からないけどね。」

明久は快く承諾した。それと同時に美波と瑞希が立ち上がりかけたがすぐに幼なじみ2人に押えられる。

「はい。ではよろしくお願いしますね。明久さん。」

「うん。よろしく、アミエーラさん。」

ここに新しいコンビが誕生した。

ちなみに宣戦布告は最初明久にやらせようとしたがなのは達の殺気で雄二本人が行った。

第12問 次のプロセスと新コンビ（後書き）

最近残業が多く疲れています。だれか俺に癒しを（泣）

だけどもげずに頑張ります。

第13問 Bクラス戦パート1（前書き）

### 第13問 Bクラス戦パート1

「さて皆、総合科目のテストご苦労だった。」

教壇に立った雄二が机に手についてFクラスの面子を向いて言う。

弁当騒動の次の日。ついさっき全科目のテストが終わり、昼食を取った所である。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

「「「おおー！」「」」

モチベーションは一向に下がらない。点数が低いFクラスの唯一の武器だろう。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

「「「おおー！」「」」

「そこで前線には姫路瑞希に指揮を取ってもらう。更に空、ハラオウン、アミエーラと明久のペアは前線で暴れてもらう。」

「が、頑張ります。」

「了解つと。」

「まかせて。」

「わかりました。」

女子と一緒に戦えるだけに前線部隊の士気は最高潮に達していた。

今回の廊下の戦闘は絶対に勝ちに行くらしく戦力は空たちAクラス並だけでなくFクラス50人中40人はつぎ込むようだ。

キンコンカーンコン

昼休み終了のベルが鳴り、ついにBクラス戦が始まる。

「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！」

「っっサー、イエッサー！」「っ」

この戦いで重要なのは敵を押し込むこと。明久たちは全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

今回のFクラスの主力は数学だ。Bクラスは文系が比較的多いことと長谷川先生の召喚範囲が広いことからだ。他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面からゆつくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる。人数が10人程度と言うところを見ると様子見のようだ。

「生かして帰すなー！」

物騒なセリフと共にBクラス戦が始まった。

Bクラス 野中 長男 VS Fクラス 近藤吉宗

総合 1934点 VS 764点

Bクラス 金田一裕子 VS Fクラス 武藤啓太

数学 159点 VS 69点

Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 君島博

物理 152点 VS 77点

だがFクラスの面子はその圧倒的な戦力差に次々と止めを刺されていく。

「やっぱりマズいですね。行きましょう、明久さん！」

「OK、アミエーラさん！」

「「<sup>サモン</sup>試獣召喚！」」

明久とアリサは同時に召喚する。

魔法陣から改造学ランに木刀と言う装備の明久の召喚獣、そしてミニスカートにへそ出しノースリーブの服に帽子、そして身の丈ほ

どの巨大な剣と言う装備のアリサの召喚獣が表れた。

Fクラス吉井明久&アリサ・イリーニチナ・アミエーラ

数学 82点&230点

「なんだ女子の点数!？」

「本当にFクラスなのか!？」

アリサの点数にBクラスの面子が動揺する。

「それじゃあ……イメージとしてはラジコンを動かしている感じで。頭にリモコンを思い浮かべてそれで操作するようにしてみて。危なくなったらフォローするから。」

「分かりました。では!」

そう言うときアリサの召喚獣は敵に向かって駆けて行った。その後ろを明久の召喚獣も付いて行く。

「えーと……こう!」

アリサの召喚獣が大上段に剣を振り上げ一気に振り下ろす。

だが動きがかなり大雑把だからか相手は簡単に避け、その隙を狙ってアリサに攻撃を加えようとするが、

「させないよ。」

明久の召喚獣が相手を思いっきり殴り攻撃を阻止する。

「そこです！」

そこにアリサが剣を振う。

明久の召喚獣は即座にその場から退避し、切り裂かれたのはBクラスの生徒の召喚獣だけだ。

「どう？」

明久がアリサに感触を聞く。

「そうですね………まだまだです。もうちょっとお願いします。」

「分かった。」

とそこへ、

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……。」

「ごめんアキ君。瑞希に付き合ってた。」

「遅れた分は取り返すぜ。試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

遅れた瑞希にそれに付き合っていたフェイトと空が合流し、空が召喚する。

コバルト色で背に狼のエンブレムが刻まれた上着に黒に所々コバ



ルトがあしらわれたズボン。そしてアリサのより巨大な片刃の大剣を持った空の召喚獣が現れた。

Fクラス 青葉空 数学 210点

「なっ！？あいつも点数高いぞ！」

「私も行くね。試<sup>サモン</sup>獣召喚！」

続けてフェイトが黒い服に白いマントを羽織り、金色の刃をした鎌のような杖を持った召喚獣が現れた。

Fクラス フェイト・T・ハラオウン 数学230点

「また200点台!？」

「いったいどうなってんだ!？」

Bクラスは次々と現れる高得点者に動揺を隠しきれない。

「おいおい、そんな動揺していていいのか？」

その隙について空の召喚獣は一気に間合いを詰め大剣で相手の召喚獣を一刀両断する。

「くそ！高得点者は二人で当たれ！」

Bクラスの指揮官が叫ぶとBクラスの面子はその言葉道理に空、フェイト、アリサに二人係で挑んでくる。

「ちっ、これはちっと・・・」

「そうだね・・・」

空とフェイトは唸った。

確かに二人はAクラス並の点数だが、それでも200点台前半だ。Bクラス相手だと1対1なら余裕だが、1対2になると厳しくなる。

と、

「フェイトちゃん、手伝うよ!」

「援護するで!空君!」

そこにはやてとなのはが入った。

Fクラス 高町なのは 数学222点

Fクラス 八神はやて 数学156点

「また!?!」

「一体どうなってるんだ!?!」

「ありがとう、なのは。」

「助かったぜ、八神。」

二人はそれぞれのパートナーに礼を言つと戦闘に集中する。

ちなみにアリサ、明久ペアは、

「こうきて・・・・・・・・こう!」

アリサ召喚獣が剣を切り上げから切り下しの攻撃をする。

たどたどしい動きに相手の召喚獣は初手を避け、次も避けようとするが、

「よつと。」

明久の召喚獣の足払いで転倒し、そのまま、アリサの召喚獣の攻撃をくらう。

「よし、前線は・・・・・・・・だいが安定してきたね。」

「そうですね。」

明久とアリサは前線の様子を見て呟いた。

「明久、アミエーラ、わしらは教室に戻るぞ。」

「へ?」

「なんですか?」

その二人のところに秀吉がやってきた。

「Bクラスの代表じゃが・・・・・・・・」

「うん。」

「あの根本らしい。」

「根本ってあの根本恭二？」

「うむ。」

その言葉にアリサは不快そうに眉をひそめた。

根本恭二。恐ろしく評判が悪いことで有名だ。カンニングの常連だとか、球技大会で相手に一服盛ったとか喧嘩に刃物は当然装備などだ。

「なるほど。戻っておいたほうがよさそうだね。」

「雄二に何かあるとは思えんが念のための。」

「だったら早く戻りましょう。」

そして3人は指揮をとっていた瑞希に報告して教室に戻っていった。

**第13問 Bクラス戦パート1（後書き）**

戦闘は核となる人たちをピックアップしながら書いて行こうと思います。

## 第14問 Bクラス戦パート2（前書き）

連日投稿！やればできる俺！

でもおかしいところあるかもです。指摘どんどんお願いします。

ではどうぞ！

## 第14問 Bクラス戦パート2

「うわ・・・・・・・・こりゃ酷い。」

「まさかこうくるとはのう。」

「卑怯ですね。」

教室に戻ってきた明久たちが見たのは穴だらけになった卓袱台にへし折られたシャーペンや消しゴムだった。

「酷いね。これじゃあ補給がままならない。」

「うむ、地味じゃが点数に影響が出る嫌がらせじゃな。」

「ていうか・・・・・・・・根本さんって器が恐ろしく小さいような気が・・・・・・・・」

アリサがあきれたように言った。

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが作戦に大きな支障はない。」

そこに雄二が入ってきた。

「雄二がそう言うならいいけど・・・・・・・・ていうかなんで雄二は教室がこんなことになっているのに気付かなかったの？」

昼休みまではいつも通りだったはずだから戦闘開始から今まで間

にやられた嫌がらせだろう。雄二はあの後教室にいたはずだから嫌がらせをやられたら気付かない方がおかしい。

「協定を結びたいと申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた。」

「協定・・・ですか？」

「ああ。4時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争にかかわる一切の行動を禁止する。つてな。」

「それ、承諾したの？」

「そうだ。」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃない？」

「姫路以外は、な。」

その言葉にみんなが納得した。

このクラスにはAクラスレベルが姫路を除いても3人はいる。

しかし、もしもの時に備えて万全にしておいても損はない。

「あいつ等を教室に押し込んだら戦闘は終了だろう。」

「そうなると作戦の本番は明日じゃな。」



「まあ、しかたないですね。」

そんななか明久は不信感を持っていた。

確かにこの協定を結めばこちらにメリットはある。しかし教室の設備を破壊した男がこちらが有利になる協定を結ぼうとするだろうか。そこが気がかりだった。

「明久、アミエーラ。とりあえずわしらは前線に戻るぞい。向こうでも何かされてるかもしれん。」

「そうですね。行きましょう、明久さん。」

「う、うん。」

明久たちはそのまま教室を出て行った。

「まだ何かしてくるかもしれないから秀吉、気を付けてね!」

「うむ、そっちもな!」

「大丈夫ですよ。いざとなったら明久さんが守ってくれますから。」

「へ!？」

「何驚いてるんですか。女の子を守るのは男の子の役目でしょ。」

そう言うときアリサはいたずらっぽく笑った。ちょっとした軽口だ。

「はいはい！」

それに明久は答えると部隊に戻っていった。

「明久、アミエーラ！戻って来たか！」

二人の接近に気づき、声を上げたのは空だ。

「待たせたね！戦況は？」

「マズイことになっちまった。島田が人質になった。」

「「なっ！？」」

その言葉に明久とアリサは同時に声を上げた。

「そのせいであつちは残り2人なのに攻められへんでにらみ合いの状況や。」

空と組んでいたはやてが説明した。フェイトとなのはのペアは見当たらない。恐らく別の部隊の援護に向かったのだろう。

「とりあえず状況を確認したい。前に行っても大丈夫？」

「ああ、こっちは飛び道具を使えるからいざとなったら援護する。」

空が前を歩いてその後を2人が続く。

Fクラスの部隊の人垣を抜けるとBクラスの生徒と捕えられた美波及び召喚獣の姿があった。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら召喚獣に止めをさしてこの女を補修室送りにするぞ！」

あえて戦死にはせず人質にしてFクラスの士気を挫く作戦らしい。

そして状況をみて吟味して明久が出した答えは、

「総員突撃——！」

「マジですか!？」

突撃だった。アリサが普段使わないような言葉を使った。

「ま、待て、吉井！」

敵からの言葉に明久の動きが止まる。

「こいつがどうして俺達に捕まったか分かるか？」

「？」

明久は首を傾げる。

「こいつ、お前が怪我したって偽情報流したら部隊離れて一人で保健室に向かったんだよ。」

「え！？・・・・・・・・・・島田さん。」

「な、なによ」

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんてアンタは鬼か！」

「違うわよ！」

「・・・・・・・・・・いや否定できませんね。」

アリサの放った言葉に全員が目を丸くした。

「な、アリサ！アンタ何言ってる！」

「いや、趣味が明久さんを殴ることって聞いたならその考えに嫌でも結びつきますよ！」

アリサの言葉に思わず全員が納得してしまった。

それで心配してくれてると思った人は恐らくDMだろう。

「まあ、それは置いて、明久さん、このままでは美波さんは補修室に送られますよ。」

「！？アミエーラさんはあの島田さんが本物だっていうの！？」

「あ、偽物って事前提だったんですね。」

アリサはあはは、と乾いた笑いを浮かべた。

「うん、そうだけど？」

「まあ．．．．．その、言わせてもらいますけどご本人の偽物はまあ、ぶっちゃけ用意できるでしょうけど「ちよっと、アリサ！」召喚獣の偽物は用意できませんよ。」

その言葉に明久はあ、と声を上げた。

その人の召喚獣はその人にしか召喚できないもし仮に美波が偽物だとしても召喚獣の方は本物の為止めを刺されれば美波本人は補修室行き決定だ。

「じゃあ．．．．．どうする？」

「うゝゝゝん．．．．．ん？今の教科は英語Wですか．．．  
．．．．．ではアタシが行きます。試獣<sup>サモン</sup>召喚」

そう言ってアリサは召喚獣を呼び出す。そしてその剣を變形させる。

刀身が引っ込んでその代りガトリング砲の銃身が現れ、持ち手が変わり、巨大な銃になった。

「ま、まさか．．．．．」

その後の行動が予想できたのか美波の顔が青ざめる。

「ごめんなさい、美波さん。骨は拾いますね。ホーミングレイ。」

次の瞬間銃口から紫のレーザーが無数に飛び出した。

「な!？」

「うそだろ!？」

「アリサのバカーー!!」

Bクラス並びに美波の絶叫が響いた瞬間、レーザーは器用に美波の召喚獣を避け、Bクラスのだけを撃ち抜いた。

「」「へ?」「」

その場にいた全員が呆けたような声を出した。

Fクラス    アリサ・イリーチア・アミエーラ    英語W    400点

「アタシの腕輪の能力はホーミングレイ。敵だけを自動で追尾してくれるレーザーを放つんですよ。」

「へ、へえ。」

得意げに胸を張るアリサを見て明久は感心するしかなかった。

まあ、なにはともあれ美波を無事救出出来た。

「ちよつと、アリサ!」

攻撃にさらされかけた美波がアリサに詰め寄る。

「すいません、美波さん。ですが敵をだますにはまず味方からつて言うじゃないですか。下手に教えて、それではばれて変な対処されるよりはマシでしょ？」

「ま、まあ………所で吉井はウチを最初から偽物だつて思ってたわけ？」

「いや、ちょっと、島田さん。殺気を押えて。」

「待つてください。そもそも、美波さんが戦線を離れなければこんなことにはなりませんでしたよ。」

「な！アリサはどこまで吉井の肩を持つのよ！」

「アタシはあくまでも事実を言ってるだけです。」

その言葉に美波は押し黙る。

「とは言え、最初から偽物と断定していた明久さんにも非はありますし………そうですね、ここは妥協案としてお互い相手の言うことを一つ何でも聞く。これで手を打ってはどうか。」

その言葉に明久と美波は目を丸くした。

「ま、まあそれなら良いわよ。」

「まあ、僕もそれで無事で済むならいいけど……僕何も命令するような事ないよ。」

「ウチはあるわ。吉井、これからウチはアンタの事をアキって呼ぶわ。だからアンタはウチの事を美波様と呼びなさい。」

「対等じゃない！」

流石に予想外だったのかアリサは目を丸くした。

「冗談。美波って呼びなさい。」

「う、うん。分かった。」

そして4時になり、この日の戦争は終了となった。



第14問 Bクラス戦パート2（後書き）

いや、あれはある意味当然だと思います。

あと、アリサって結構物事をズバズバ言う感じがするので。

では！

## 第15問 Bクラス戦パート3（前書き）

連日投稿もういっちよう！

ちよつとBクラス戦は書きたい場面があるんで頑張っています。

ですがそろそろゴッドイーターも書かなきゃいけないのでつぎ連日できても1話が限界ですね。

ではどつぞ！

### 第15問 Bクラス戦パート3

「ただいま」

戦闘終了後明久たちは教室に戻って来ていた。

「アキ君、はやてちゃん。お帰り。」

「二人とも大丈夫だった？」

一足早く帰って来ていたなのはとフェイトが明久とはやてに駆け寄った。

「うん、大丈夫だよ。」

「全然平気や。なんならこれからBクラスに一人で突っ込んで行ってもいいで。」

明久は素直に、はやては冗談交じりで返した。

「なあ雄二。今のところは作戦通りでいいのか？」

頭の後ろで手を組みながらコウタが聞く。

「ああ。今のところは作戦通りだ。ただこちらの損害が大きいな。明日は空たちが頼みの綱だ。」

「了解。」

空は気だるげに返した。どこか眠そうな雰囲気も漂っている。

「……………（トントン）」

「お、ムツツリー二。何か変わったことはあったか？」

そこに諜報活動から帰ってきたムツツリー二が雄二の肩を叩いた。

「ん？Cクラスの様子がおかしいだと？」

「……………（コクリ）」

話によるとどうやらCクラスが試召戦争の準備をしているらしい。  
Aクラス相手に戦おうとは思っていないだろうから目的は、

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな。」

この戦争で勝ったクラスを相手に戦うつもりだ。疲弊しては  
勝つの難しい。

「雄二どうする？」

「んー、そうだな。」

唸った雄二は時計をちらりと見る。現在時刻4時半。それほど遅い時刻ではない。

「Cクラスと協定を結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、  
とか言って脅してやれば攻め込む気もなくなるだろう。」

「それに僕らが勝つとは思っていないだろうしね。」

「それなら早く行こうぜ。」

「そうですね。」

そう言つて雄二、明久、コウタ、アリサは立ち上がった。4人が行くらしい。

「秀吉はここに残っていてくれ。」

「ん？なんじゃワシは行かなくても良いのか？」

「お前の顔を見せると万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな。」

「よくわからんが雄二がそう言うのであれば従おう。」

素直に秀吉は引き下がる。空は雄二の作戦と言つ言葉になぜだか嫌な予感を感じた。

「じゃ行こうか。人数少なくて不安だけど。」

そして4人はCクラスに向かった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

Cクラスの教室にはまだ結構な人数が残っている。

「私だけど何か用かしら？」

明久たちの前に出てきたのはまじりつけのない黒髪をベリーショートにした気が強そうな女子、小山友香が前に出た。

その女子を見た気がしてコウタは頭をひねった。

「ちょっと話したいことがあってな。」

「話？内容は？」

「ああ、Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん……」

友香はどこかいやらしい笑みを浮かべた。それが明久は引っこかった。

「ああ、ふ「ああー！ー！！思い出した！！」どうしたコウタ？」

雄二の言葉を遮るほどの音量でコウタが叫んだ。

「こいつ根本の彼女だ！去年こいつが根本と親しげに話してたの見てクラスの面子に来たら付き合ってるって言ってた！」

「なに！？」

その言葉に明久たちは驚愕し、友香は忌々しそうに顔をしかめた。

そしてアリサは即座に教室内を注意深く見た。そして、

「いました！根本さんにBクラスの生徒です！」

アリサが教室の一角にいた根本たちを見つけた。

「協定違反を理由に攻めるつもりだったんだね。」

「危なかった。あと少しコウタが思い出すのが遅かったら間に合わなかったな。」

「ふう、何とかなつたぜ。」

雄二はあくまでもクラス間交渉に來たと言った。試召戦争関連はまだ言っていない。屁理屈かもしれないがそれでも十分通る。

「くそ！こうなつたらお前らやつちまえ！」

すると根本は生徒に攻めるように命じた。

「な！？根本君それは立派な協定違反だ！」

「知ったことか！」

「ちつ！ここは逃げるぞ！」

雄二の言葉と共に明久たちは教室から飛び出した。その後をBクラスの生徒が追ってくる。

（くっ、このままじゃあマズイな。なにか・・・・・・・・・・  
ん？あれは日本史の・・・・・・・・・・なら）

次の瞬間明久は走るのをやめるとBクラスの生徒に向き直った。

「雄二！ここは僕が時間を稼ぐから先に行つて！」

「な、何言つてんだよ明久！」

「危険すぎます！アタシも残ります！」

コウタとアリサが叫ぶ。

「雄二、早く！」

「・・・・・・・・・・大丈夫なのか？」

「もちろん！」

「・・・・・・・・・・分かった行くぞ、コウタ、アミエー  
ラ。」

「なんだと！雄二デメエ！」

「明久さんを見殺しにするつもりですか！？」

コウタとアリサが雄二に喰つてかかる。

「本人が大丈夫だって言ってるんだ。ここは信じるぞ。」



「ですが……早く!」~~~~~わかりました!でもちゃんと帰ってくるんですよ!」

「じゃなかったらお前の座布団に画鋏仕込んでやるからな!」

そう言う雄二たちは先に走って行った。

「おい、バカの吉井が一人で立ってるぞ。」

「さっさとぶち殺すぞ。」

Bクラスの生徒は余裕の表れか、足取りを緩めた。

その生徒に向かって明久はゆっくりと笑みを浮かべた。

「選択科目を誤ったね。」

「「は?」「」

「さあ……………エサの時間だ。」

「ただいま~~~~」

明久はのんびりとした口調で教室に戻ってきた。と、

「アキ君！」

となのはが飛びついてきた。

「うわ！」

明久はひっくり返りそうになるがなんとか堪える。

「大丈夫だった！？怪我とかしていないよね！」

そう言うとなのは明久の体をぺたぺたと触りだした。

「だ、大丈夫だよ。そもそも試召戦争で怪我なんかしないよ。」

「そ、そっか……。でも無事でよかった。」

「なのはは心底安堵したように息を吐いた。

「まったく、アキ君は無茶すぎだよ。」

フェイトも割って入ってきた。本当は彼女も明久に抱きつきたいところだったのだがここはなのはに譲つたらしい。

「勝てたんですか？明久さん。」

そこにアリサも入ってきた。

「まあね、相手が同時に襲いかかってきたから骨が折れたけど何とか……」

「まあ、無事でよかったわ。」

はやても明久の無事を喜んでいた。

「あゝお前らちょっといいか？」

「「「ん？」「」」

雄二が声を上げたことでみんなが雄二を向いた。

「こうなった以上Cクラスも敵だ。同盟船が無い以上は連戦と言  
う形になるだろうが正直Bクラス戦の後にCクラス戦はきつい。」

「じゃあどうする？このままじゃあ勝ってもCクラスにやられるぞ。」

「心配するな。向こうがそう来るならこっちにも考えがある。」

雄二はどこか自信たっぷりに告げる。

「考えだあ？」

「ああ、明日の朝に実行する。目には目を、だ。」

そしてその日は解散となり続きは明日に持ち越しになった。

明久宅

「まさかそうくるとはね、根本君・・・・・・・・・・・・・・・・」  
でもねそうはさせないよ。」

そう言つと明久は携帯で誰かに電話をかけた。

## 第15問 Bクラス戦パート3（後書き）

はてさて結構伏線があります。

ネタバレ、これはAクラス戦ではつきりします。

では次回！

## 第16問 Bクラス戦パート4（前書き）

連日投稿最終！

明日からはゴッドイーターを書きはじめます。

しかし、人間やればできるもんですね。

ではどうぞ！

## 第16問 Bクラス戦パート4

「昨日言っていた作戦を実行する。」

翌朝登校した明久達に雄二は開口一番にそう告げた。

「作戦？でも開戦時刻はまだだよ？」

今の時間は午前8時半。開戦時刻は9時だから確かに早い。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ。」

「なるほどな。で、何やるんだ？」

「秀吉にこれを着てもらう。」

そう言つて雄二が取り出したのはここ文月学園の女子制服だ。

「すいません。それどこから調達したんですか？」

アリサが完全に呆れて聞いた。

「細かいことは気にするな。」

雄二は気にした風もない。

「それは別に構わんがわしが女装をしてどうするんじゃない？」

「いや、そこは構おうぜ秀吉！つつかお前本当に男として見ても

らいたいのか!？」

空が大きな声でツッコむ。

「秀吉には木下優子としてAクラスの使者を装ってもらおう。」

「いや、まあ……確かに二人はかなりそっくりだけどよお、そっからどうするんだ？」

「そっからはまあCクラスを挑発してくればいいんだ。」

その言葉に空は納得していないように顔をしかめた。

「大丈夫じゃ空。姉上も最近性格が丸くなってきたじやろう。だから滅多な事では怒らんよ。」

「………ちなみにどんなことを言おうとしている？」

聞いた空に秀吉は耳打ちをする。

次の瞬間空は秀吉の肩をがっちりと掴んだ。

「だめだ秀吉。そんな事を優子として言ってみろ。お前間違いないく優子に殺される。」

「え、いや、じゃが姉上ならそれくらいは……」

「とにかく言うなそれだけは。いくら丸くなったとしても間違いないくブチ切れる。」



そう言つと空は雄二に向き直つた。

「その案は却下だ。幼なじみとして秀吉を危険にはさらさせることは出来ない。」

「いや、だがそうなるとだな・・・」

「だったらCクラスは俺一人で相手する。腕輪を使えば十分に行ける。」

空は毅然とした態度で言い放つ。

「ぐ、むむむむむ。」

雄二は空が決して折れないということを感じ取ると唸つた。

と、廊下を覗いていた明久が、

「ねえ、いまCクラスに誰が入っていったよ。ちょっと見に行ってみない。」

と言つてきた。

「何言ってるんだ明久。どうせクラスの生徒だろ。そんなの見に行つてどうするんだ。」

「まあまあ行つてみようよ。もしかしたら他のクラスの生徒が宣戦布告をしに行ったのかもしれないよ。」

明久の言葉に雄二は唸る。

確かにひょっとしたらEクラスがやるという可能性は捨てきれないが確率は恐ろしく低いし、勝つ確率も低い。そんなのに頼るぐらいなら確実にCクラスをどうにかできる方法を出す。しかし、空がこの調子では作戦が出来ない。

「まあ、頭を切り替える意味で行くか。」

「うんじゃあ決まりだね。行こうか。」

そう言つと明久と雄二はCクラスに向かった。

近くに来ると話し声が聞こえる。

雄二はだるそうに耳を立てている。が、

「俺達AクラスはCクラスに宣戦布告を行う。」

「「「な!?!」」」

「!?!」

その言葉に目をむいた。

「な、なんでAクラスが!?!」

「そんなのこっちの事情だ。いちいち話してやる義理は無い。時間10時からだ。忘れるなよ。」

その言葉と共にCクラスから一人の生徒が出てきた。

褐色の肌に白い髪をした少年だ。

その少年はこちらを見るとわずかに唇のはじを上げた。

それを見た明久は同じように唇のはじを上げた。

そのままその生徒は歩き去って行った。

「まさかAクラスが宣戦布告をやるとはね。でもこれでCクラスは抑えられたね、雄二。」

「あ、ああ。そうだな。」

雄二はあまりに想定外の出来事にいまだに衝撃から抜けきっていなかった。

「ドアと壁をつまく使うんじゃない！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

その後午前9時にBクラス戦が開始され、明久達は中断された位

置、Bクラスの前から進軍を始めた。

作戦内容は敵を教室内に押し込めること。

そして作戦を実行させようとしているが一つ問題がある。

なぜか総司令官である瑞希が一言も指示を出す気配がないのだ。

「勝負は極力単体強化で挑むのじゃ！補給も念入りに行え！」

いま指示を放っているのは副司令官の秀吉だ。

「左側出入口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

このままでは突破されるのは時間の問題だ。

「姫路さん、左側の援護を！」

「あ、そ、その……」

明久は瑞希に指示を飛ばすが当の本人は戦線に加わらず泣きそうな顔をして、オロオロしている。

「くそ！アミエーラさん行くよ！」

「いや、無理です！アタシ古典40点しかないんですよ！」

「うそ！？」

明久は思わず目を丸くした。

その隙に、

「突破はさせないよ!」

なのはが割り込んだ。

「ごめんなのは!助かった!」

「どういたしまして!」

「なのは、手伝う!」

更にそこにフェイトも加わり戦線を保った。

「姫路さん、どうかしたの?」

その隙に明久は様子がおかしい瑞希に声をかける。

「そ、その、なんでもないんです。」

「何でもありませんよ。どう見たって様子がおかしすぎます。」

そこにアリサも加わる。この原因をはっきりさせない事にはどうしようもない。

さらに聞こうとしたところで、

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

Bクラス内に拉致された模様！」

右側がBクラス得意科目に切り替わり、明久たちはかなり追い詰められた。

「私が行きます！」

そう言つと瑞希が戦線に加わろうと駆け出した。が、

「あ………」

急にその動きを止めてうつむく。

不審に思つたアリサがその方向に目を向けると、

「明久さん、あそこ。」

普段よりもずっと冷たい声に明久は素直にその方向に目を向ける。

そこには窓際で腕を組んでこちらを見下ろす根本がいた。そしてその手にはなにかが握られていた。

それに明久は見覚えがあつた。

それは3日前に明久が見かけた封筒だ。

「・・・・・・・・・・なるほどね。」

明久も恐ろしく低い声で呟く。その声には明らかな怒りが含まれている。

「姫路さん。」

「は、はい・・・・・・・・」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないから体調管理は気を付けてね。」

「・・・・・・・・はい。」

「じゃ、僕等はあるから！」

「あ・・・・・・・・！」

「空さん、はやてさん！右側の出入り口お願いします！」

「まかせとき！」

「あいよー！」

そして2人はその場から走り出す。

「面白い事してくれるじゃないか、根元君。」

「ええ、そうですよね。ここまでやってくれたんですからちょっとお礼でもしますか。」

そう言つと明久とアリサは互いの手を叩いた。

「じゃあ、やろうか、相棒。」

「ええ、そうですね、パートナー!。」

「あの野郎(あの人)ぶち殺す(許さない)」  
「」



## 第16問 Bクラス戦パート4（後書き）

さて、Bクラス戦最終の予定は・・・明久、アリサコンビ＋  
が本気でいきます。

ではまた！

**第17問 Bクラス戦パート5（前書き）**

今回でBクラス戦は終了です。

明久の本気の実力が明らかに・・・・・・・・

ではどうぞ！

## 第17問 Bクラス戦パート5

「雄二（坂本さん）！」

「うん？どうした明久にアミエーラ。脱走か？チョコキでシバくぞ。明久だけ。」

「なら僕は鼻を裏拳でそぎ落としてあげるよ。」

「話がずれそうですよ、明久さん！」

教室に飛び込むなり雄二と物騒な話をする明久をアリサが落ち着ける。

「話があるんです。」

「聞こうか。」

最初こそジョークを言っていた雄二だが二人のただならぬ雰囲気  
に真面目な顔をする。

「根本君の制服が欲しいんだ。」

「…………お前に何があつたんだ？」

「明久さん！それじゃあただの変態です！」

アリサが慌ててツッコむ。

「まあいいだろう。処理の暁にはそれくらいなんとかしてやろう。」

「受け入れちゃダメです、坂本さん！」

今回、アリサは大忙しである。

「それと、姫路さんを戦闘から外してほしい。」

その一方で明久はそんなの二人のやり取りや自分の言ったことなど知ったことかと言う風に話を続ける。

「理由は？」

「いえ、言えません。」

「どうしてもなのか？」

「どうしても（です）」

二人は声をそろえて言う。

それに雄二は顎に手を当てて考え込む。

これはかなり重大な問題だ。Bクラスを瑞希抜きで戦うなど、かなりの戦力ダウンにつながり、負ける確率がかなり上がる。

「……………条件がある。」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前らがやるんだ。必ず成功させる。」

「それくらい!」

「もちろんやってみせるよ!」

「いい返事だ。」

二人は自信満々と言うふうに頷く。

「それであたしたちは何をやればいいんですか?」

「タイミングを計って根元に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい。」

「

「皆のフォローは?」

「ない。しかもBクラス教室の出入り口は今の状態のままだ。」

「厄介な注文ですね。」

アリサは顔をしかめた。

しかし、その隣で明久は少し思案顔を見ると、

「分かった、やるよ。」

そう言った。

「そうか、それじゃあうまくやれよ。」

そう言つと雄二は教室を出て行こうと立ち上がる。

「ちょっと、どこかいくんですか？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな。」

例の件とは室外機の件だろう。

だが、

「必要ないよ、雄二。」

「「は?」「」

アリサと雄二の声が重なる。

「そんなことしなくても・・・・・・・・・・僕が奴を喰い裂いてやるから。」

そういつと明久は笑った。まるで目の前に獲物を見つけた獣のよう  
うに。

「それで明久さん。どうするんですか？」

Bクラスへ向かう途中でアリサは明久に作戦内容を聞いた。ちなみに日本史の先生はすでに捕まえている。

「単純。僕がBクラス内にいるBクラスの生徒全員に日本史で勝負を仕掛ける。アミエーラさんは援護をお願い。」

「そ、そんな！無茶です！」

アリサは文字通り目を剥いた。

Bクラスはまだかなりの生徒が残っている。いまはその大半が教室内にいる。どう考えても援護があつたとしても突破は無理である。

「それに、アタシはまだ召喚獣の扱いが……」

「大丈夫だよ。アミエーラさんなら大丈夫。自分を信じて。」

明久はまっすぐにアリサの目を見て言った。

そこには確かな信頼がある。それを見てしまったら答えない方が申し訳がない。

「………わかりましたよ！ただし！外れても責任は取りませんよ！」

「OK!じゃあ、頼むよ!」

そうして二人はBクラスにたどり着いた。

そしてFクラスの生徒の間を縫ってBクラス内に入ると、

「Fクラス、吉井明久!」

「Fクラス、アリサ・イリーニチナ・アミエーラ!」

「教室内にいるBクラス生徒に日本史で勝負を挑みます!!」

「「「はあ?」」」

教室内にいたBクラスの生徒は全員呆けたような声を上げた。

「はは、お前らバカか。この数を相手に2人で勝てるわけがないだろう。」

代表の根本は二人を見下すように笑う。

その声を無視して魔法陣から二人の召喚獣が現れ、点数が表示される。

Fクラス   アリサ・イリーニチエア・アミエーラ   日本史   23  
0点

Fクラス   吉井   明久   日本史   436点



「何——！！！！！！」

まさしく教室を揺らすかのような大音量の絶叫が響き渡った。もちろんBクラスの生徒だけでなくFクラスの生徒も絶叫した。

「な、何だ吉井のあの点数!？」

「ありえねえ！おかしすぎだろ！？」

「一体どうなってんだ!？」

これにはアリサも驚いていた。

「明久さん……………すごいです！」

「まあ得意科目だからね。それじゃあ、……いくよ！」

そう言うのと明久の召喚獣は手じかなBクラスの召喚獣に近づくとも刀を一閃。

打撃を与えるはずの木刀はしかし相手の召喚獣を真つ二つに切り裂いた。

「何ぼけつとやってんだ！数で押しつぶせ！」

やや焦った声で根本が指示を出し、それでBクラスの生徒は我に  
 返り、明久になだれ込もうとするが、

「アタシを忘れてもらっては困りますね！」

そこにアリサが銃に変形した神機を乱射。弾幕でBクラスの召喚獣を足止めする。明久の召喚獣はその弾を器用に避けていく。

「さて、それじゃあ……………本気で行くよ。」

そう言うつと明久の召喚獣の右手に光る黒い腕輪が更に光る。

「プレデター！」

明久の言葉と共に召喚獣は木刀を突きだす。

すると、そこから黒い巨大な恐竜のような顎が飛び出した。

その顎は目の前にいたBクラスの召喚獣を丸呑みにしてぐちゃぐちゃと噛み砕く。

「な、なんだよ……………あれ。」

その光景に思わず再び全員の動きが止まる。

顎は食事が終わるとそのまま引っ込んだ。

「さあ……………行くよ！」

明久が叫んだ瞬間、

Bクラスの召喚獣3体の首が飛んだ。

「……は？」「」

またBクラスから間拔けな声が出た。

「僕の腕輪はプレデター。武器から巨大な顎を出して、それで攻撃。相手を喰らう事が出来たら一定時間攻撃力、スピードが上昇するバースト状態になれるんだよ。」

明久は余裕の表れか腕輪の事説明した。

「……………は！なにしてる！さっさとやっちゃまえ！」

根本が指示を飛ばすが、召喚獣が何かに喰われるという見慣れない異様な光景を見て全員が動けなかった。

「来ないならこっちから行くよ！」

「さあ、行きますよ！」

次の瞬間、明久の召喚獣はBクラスの団体に突っ込むと次々と召喚獣を切り裂き突き刺していく。

何とか攻撃しようとする者もいるがそれはアリサの銃撃でことごとく撃ち抜かれていく。

時節その弾が明久の召喚獣に飛んでいくが明久の召喚獣はそれを器用に避けていく。

そして結果、Bクラス内を二人はあっという間に制圧した。残っているのは根本だけだ。

「ば、化け物！」

先ほどまでの強気な態度はどこへやら。完全に逃げ腰だ。

「さて、あとは君だけだよ、根本君。」

「さっさと召喚したらどうですか？」

二人の言葉、いや、その言葉に隠された、しかし、確かな怒りを  
感じ取り根本は察した。

こいつらにはどうやったって勝てないと。

そして根本は負けると分かりながらも召喚獣を召喚。

その召喚獣を明久のプレデターが一気に噛み砕いた。

こうしてBクラス戦は終了した。

**第17問 Bクラス戦パート5（後書き）**

ゴッドイーターなのにプレデターが無いのはどうかと思ったので  
明久の腕輪にしました。

なぜ日本史があんな点数なのかはまた後程。

では！

**第18問 Bクラス戦後（前書き）**

最近バカテスの更新がすいすいと行きます。

ゴッドイーターもこのくらいで行けたらなあ……………

まあ、とりあえずどうぞ！

## 第18問 Bクラス戦後

「二人とも今回は大活躍だったのう。」

「ほんと、いいところ取りしやがって。」

終戦後、Bクラスの教室にやってきた秀吉と空は明久とアリサにそう話しかけた。

「いえ、アタシはほとんど役に立ってませんよ。明久さんが活躍したんですよ。」

「いや、アミエーラさんのおかげであそこまでできたんだからアミエーラさんもすごいよ。」

対し、二人はお互いに謙遜し、お互いを褒めていた。

「しかし驚いたぞ。明久があんな点数を取っていたなんて……」

雄二は心底驚いたという風に言った。

「ま、日本史だけだよ。結構得意だから力を入れていたらあの点数になったんだ。」

明久は肩をすくめて言う。

「さて、それじゃあ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「・・・・・・・・・・」

雄二の目の前には床に座り込んでいる根本がいた。

「本来なら設備を明け渡してお前らには素敵な卓袱台をプレゼントしたいところだが特別に免除してやらんでもない。」

その雄二の発言に周囲がざわざわと騒ぎ始める。

「皆落ち着け。前にも言ったが俺たちの最終目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない。」

「そうだね。」

「ここはあくまで通過点だ。だからBクラスが条件を呑めば開放してやるうかと思う。」

その言葉でFクラスの面子は納得したような表情をした。

「・・・・・・・・・・条件は何だ。」

力なく根本は聞く。

「条件？それはお前だよ。負け組代表さん。」

「俺、だと？」

「ああ、お前には少々好き勝手してもらったし、正直去年から目障りだったんだよな。」



結構なことを言われているが周囲のだれもフォローをしない。それだけのことを根本はやってきたのだ。

「条件はこうだ。Aクラスに行つて試召戦争の準備ができていると宣言して来い。それで設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ。」

「・・・・・・・・それだけでいいのか？」

根本は疑うような視線を雄二に向ける。

「ああ。Bクラス代表がこれを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう。」

そう言つて雄二が取り出したのは秀吉が着る予定だった女子の制服。

ちなみに本来は宣戦布告だけだったのだが明久たちの根本の制服を手に入れるためにいれた工程だ。

「ば、馬鹿な事を言つな！この俺がそんなふざけたことを・・・・・・！」

「Bクラス生徒全員で必ずやらせよう！」

「任せて！必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるならやらない手は無いな！」

Bクラスの生徒は恐ろしいぐらいにやる気を出した。これだけでも根本がどういった行動をしてきたかがよくわかる。

「んじゃ、決定だな。」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました。」

「お、おう。ありがとう。」

一瞬で代表に見切りをつけ、腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子生徒の変わり身の早さに雄二も驚いている。

「では、着付けに移るか。明久、任せたぞ。」

「了解。」

そして明久はぐったりと倒れている根本に近づくと制服を脱がせていく。

「う、うう………」

根本がうめき声をだし目を覚ましそうになる。

すると明久は左手で右手をつかみ、右ひじを突きだすような体制をとるとそのままジャンプして体を横にし、落下の勢いと全体重を乗せ右ひじを根本に叩きこむ。

「ぐはあ!？」

その威力に間違いなく根本は意識を失った。これでは宣戦布告が出来ないかもしれないがその時は強制的に起こすだけだと明久は気にしないでいた。

「うーん……これどうするんだろう？」

男子と違う制服にやり方が分からず明久が頭をひねっていると、

「私がやってあげるよ。」

Bクラスの女子一人がそう提案してきた。

「そう？悪いね。それじゃあ折角だし可愛くしてあげてよ。」

「それは無理。土台が腐っているから。」

その言葉に明久は苦笑とも心からの笑いとも取れる笑みを浮かべた。

「じゃ、よろしく。」

そう言っ明久は根本の制服を手にその場を離れた。

そして根本の制服をこそごととあさり、

「お、あつたあつた。」

目的の封筒を手に入れた。

「明久さん。どうでしたか。」

そこにアリサが加わった。

「うん。ちゃんと取り返したよ。」

そういつて明久は封筒を見せた。

「そうですか。よかった……まさか明久さん、中身見えてはいませんか？」

「いや、見てないよ！そもそもさっき見つけたんだよ！」

「くすっ、分かってますよ。」

そう言うたアリサは封筒を受け取った。

「これはアタシが瑞希に返しておきますね。」

「うん。お願い。僕はこれからこの制服を捨ててきちゃうから。」

「そうですか、では。」

そう言うたアリサは教室に向かったが途中で何か思い出したように振り返った。

「そうそう明久さん。これからはアタシの事アリサって呼んでいいですよ。アタシは明久って呼びますから。」

「え？何でまた……」

「気分ですよ。それじゃあまた明日にでも、明久。」

「う、うん。分かったよ、………アリサ。」

そしてアリサは去って行った。

「え〜と瑞希の卓袱台は………これですね。」

アリサは教室にて瑞希の卓袱台を見つけると封筒を置いた。

「さて、それじゃあ帰るとしますか。」

「アリサちゃん！」

アリサが振り返ると瑞希が立っていた。

「ああ、瑞希。大丈夫ですよ。ラブレターはキッチンとあなたの卓袱台に返しました。」

「………」

「しかし、明久って本当にいい人ですよ。あそこまで人の為に頑張れて、怒ることができるなんて。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いやはや、瑞希やなのはたちが好きになる気持ちがあった気がします。」

「！アリサちゃん、まさか・・・・・・・・！」

「ええ、好きですよ。・・・・・・・・友達としてね。」

アリサはまるでいたずらが成功したような笑みを浮かべた。

「まあラブレターもいいんですけど・・・・・・・・そういう大切な想いはきちんと自分の言葉で表したほうがいいですよ。そのほうがきちんと伝わりますかね。」

「そうですか？」

「ええ、そうですよ。それじゃあアタシはこれで。」

そう言つとアリサは教室を出て行った。

## 第18問 Bクラス戦後（後書き）

アリサに立ったフラグは友情フラグです。

最終的にはやてと同じように親友になりますね。

・・・・・・はやてとは少し経緯が違いますが。

ではまた！

第19問 Aクラス戦前（前書き）

できたのでいきます。

ではどうぞ！



## 第19問 Aクラス戦前

「まずはみんなに礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのでもないみんなの協力があつてのことだ。感謝している。」

点数補給のテストが終わったBクラス戦から2日後の朝。

明久たちはもうすぐお別れになる（予定）のFクラスで最後の作戦説明を受けていた。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ていうか結構気持ち悪いぞ。」

「ああ、自分でもそう思う。あとコウタ。あとでシメる。だがこれは俺の偽らざる気持ちだ。ここまで来た以上絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃない現実を教師どもに突き付けるんだ!」

「おおーっ!」

「そうだーっ!」

「勉強だけじゃねえんだーっ!」

最後の勝負を前にFクラスのメンバーの心が一つになって来ていた。

「みんなありがとう。さて、Aクラス戦だがこれは一騎討ちで決着をつけたいと思う。」

先日の昼食時に聞いたメンバー以外はかなり驚いたようで教室内がざわめきはじめた。

「どういうことだ？」

「誰と誰が一騎討ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

「落ち着いてくれみんな。今から説明をする。」

雄二がバンバンと机を叩いてみんなを静かにさせた。

「やるのは当然俺と翔子だ。」

「馬鹿の雄二が勝てるわけ（パシッ、ヒュン）ないじゃないか。」

「あぶねえっ!？」

明久に向かってカッターが投げつけられたが彼はそれをつかむと投げた本人ー雄二に投げ返した。

何とか本人は避けたが。

「ま、まあ。明久の言うとおり翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。」

まさか投げ返してくると思っていなかったのか冷や汗をたらだ

らと流す雄二であつた。

「だがそれはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろ？まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった。今回だって同じだ。FクラスはAクラスが手に入れる。俺達の勝ち揺るがない。」

最初は勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いてきた雄二の言葉を否定する人間はここにはもういない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童をとまで言われた力を今みんなに見せてやる。」

「「「おおー！ー！ー！」」」

「さて、具体的な方法だが・・・一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ。」

「フィールド？なんの教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。」

「日本史なの？」

「ただし内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は100点満点の上限アリ。召喚獣ではなく純粋な点数勝負とする。」

「またずいぶんと変則的なルールやな。」

はやての言葉にみんなが頷いた。

「だけどそれだと同点だと延長戦ですよ？そうなったら問題のレベルは上がりますし、いくら神童と言われてたとしてもブランクがある坂本さんでは厳しいのでは？」

「アリサの言うとおりだね。」

確かに普通の勝負に比べたら集中力切れと言う形での勝ち目はあるがそれでも分が悪すぎる。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでもそこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか。」

「んじゃ、なにか？お前は霧島の集中力を乱す方法を知っているのか？」

「いいや。あいつなら集中何てしなくても小学生程度の問題なら何の問題もない。だが、ある問題が出ればあいつは確実に間違える。」

「ある問題？」

雄二の言葉になのはは首を傾げた。

「その問題は――大化の改新だ。」

「大化の改新だ？え〜と小学生レベルだと・・・・・・・・何年にやったかって感じか？」

「ビンゴだコウタ。お前の言うとおりその年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ。」

「大化の改新は645年だったよね。」

「ああ、そんな明久でも間違えない問題だが翔子は間違いなく間違える。俺たちの勝ちだ。晴れてこの教室とはおさらばってわけだ。」

雄二は自信満々に言う。そんな中でみんなが気になっていることが一つ。

「あの、坂本君。」

「ん？なんだ、姫路。」

「霧島さんとは、その……仲がいいんですか？」

そこだ。さつきから雄二は霧島の事を「あいつ」とか「翔子」などと親しげに呼んでいた。つまり顔見知り以上であることは明らかだ。

「ああ。あいつとは幼なじみだ。」

「総員狙えええっ！」

「なっ！？なぜ須川の号令でみんな急に上履きを構える！？」

「黙れ男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をした！？」

ちなみにだが明久と空、コウタ、秀吉は参加していない。

「遺言はそれだけか？・・・まつんだ横溝君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後口に押し込むものだ。」

「了解です。隊長。」

「すごいことになりましたね、明久。」

「そうだね、アリサ。でもあの霧島さんと幼なじみと言うからねえ。」

アリサの言葉に明久は苦笑した。

「あの、吉井君。」

「ん？なに、姫路さん。」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「え？いや・・・美人とは思うけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でも僕の好みじゃな・・・てっ、なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと、美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしているの！？」

「ちょ、ちょっと二人とも落ち着いてください！」

「そうだよ！そもそもアキ君、好みじゃないって言ってたよ！」

アリサとフェイトが大慌てで二人を抑える。

「まあまあ。みんな落ち着くのじゃ。」

パンパンと秀吉が手を打って場を取り持つ。

「そもそも冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ。？男である雄二に興味があるとは思えんじやろが。」

その言葉にみんなが思い出したような顔をした。

「……………おいちよつとまで秀吉。それってもしかして霧島は同性愛者っていうんじゃないだろうな？」

空がいくらか不機嫌そうな顔で聞く。

「そんな噂が流れておるんじゃ。」

その言葉に空ははあ、と深いため息を吐いた。

「何でこの学校にはきちんとした恋愛をする奴がいないんだ。」

「そういえば空は同性愛が大っ嫌いじゃったな。」

秀吉の言葉に空はこくと頷いた。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ。」

「いや、間違えて教えたなら教え直せよな。」

コウタが呆れたように言った。

「あいつは一度覚えたことは忘れない。だから今年年トップの座にいる。俺はそれを利用してあいつに勝つ。そしたら俺たちの机は――」

「『システムディスクだ!』」

Fクラスの言葉が一つになった。

が、

（ふう、確かにそれなら勝てそうだけど、悪いね雄二……  
……一騎討ちなんて絶対させないよ。）

明久は心の中で呟いた。



## 第19問 Aクラス戦前（後書き）

空の思考は自分と同じです。同性愛なんて滅んでしまえ！

あ、でも明久×秀吉は全然OKです。なぜかあの二人は行けと言  
える。・・・何故？

では次回！

## 第20問 Aクラス戦交渉（前書き）

今回の交渉は原作とは結構違います。

ではどうぞ！

## 第20問 Aクラス戦交渉

「一騎討ち？」

「ああ。FクラスはAクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎討ちを申し込む。」

今回の宣戦布告は代表である雄二を筆頭にし、明久、空、アリサ、秀吉、ムツツリー二という首脳陣半分揃いで来ていた。

「うーん、何が狙いなの？」

Aクラスから交渉に出ているのは秀吉の双子の姉で空のもう一人の幼なじみ、木下優子だ。

「もちろん、俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

優子はなにか裏があるのかと訝しんでいる。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね。だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな。」

「賢明だな。」

ここまでは予想通りだ。ここからが交渉の本番になる。

「ところでCクラスとの試召戦争はどうだった？」

雄二は腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけど、それだけよ？何の問題もなし。」

Aクラスが突如としてCクラスに勝負をかけた。その戦争は半日で決着がつき、今CクラスはDクラス程度の設備で授業を受けている。

「ていうか何でお前らがCクラスに宣戦布告を？」

雄二が今まで引つかかっていたことを聞く。

「ああ。いくら点数が高くても操作がままならないんじゃ意味がないからそれほど強くもなく弱くもないCクラスを相手に練習していた方がいいって彼がね。」

そう言っつて優子が指差したのは窓際に腕を組んで寄りかかっている褐色の肌に白髪少年・ソーマ・シックザールだ。

「なるほどな。ところでBクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……昨日来ていたあの……」

「ああ。あれが代表をやっているBクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだがさて。どうなることやら。」

「でもBクラスはFクラスと戦争したから三カ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだね？」

試召戦争のルールに準備期間と言っのがある。

戦争に敗北したクラスは三カ月の準備期間を取らない限り自ら戦争を申し込むことは出来ないというものだ。

「知っているだろう？事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってことになっているを。規約には何の問題もない。・・・BクラスだけじゃなくてDクラスもな。」

「・・・それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ。」

すると腕を組んでいたソーマが視線を明久に合わせた。その視線は語っている。

なんとか一騎討ちだけはやめろ、と。

その視線を受けた明久は小さくうなずくと、

「まあ・・・木下さんが不審がるのも無理はないね。そこでさ物は提案なんだけどお互いに一人ずつ、計3人出して、1VS1の一騎打ちをして最初に2勝した方が勝ちってのはどうかな？」

「な！おい明久！何を勝手に・・・！」

「でもこの提案が却下されたら全面戦争になるかもしれないよ？だったらちよつとでも勝ち目がある方に妥協した方がいいよ。」

明久の言葉に雄二は唸る。

「う〜〜ん・・・・・・・・いいわ。吉井君の案なら？んであげ

てもいいわよ。」

優子はひとしきり悩むと明久の提案を呑んだ。

「本当か？」

「ええ。それならこちらのリスクも結構小さく出来るしね。」

「……………はあ、仕方ない。けど、勝負する内容はこちらで決めさせてもらう。それくらいのハンデはあってもいいはずだ。」

「え？うゝん……………」

ここでまた優子は悩み始めた。クラスを代表しての交渉だから慎重になっている。

と、

「……………受けてもいい。」

「うわっ！」

「……………雄二の提案を受けてもいい。」

現れたのはAクラス代表、霧島翔子。

「あれ？だいひょういいいの？」

「……………その代り、条件がある。」

「条件？」

「……………うん。負けた方は何でもいう事を一つ聞く。」

そう言いながら翔子は雄二の後ろにいる瑞希を値踏みするようにじっくりと観察した。それを見た空はかなり深いため息を吐いた。

それでムツツリー二はカチャカチャとカメラを準備した。

「あの、土屋さん、何の準備をしてるんですか。ドン引きです。」

アリサが冷めた声でズバツと言う。

「じゃ、こうしょ？勝負内容は3つの内2つそっちに決めさせてあげる。あとの1つはこっちで決めさせて。」

「そうだな「いいよ。」な、明久！？」

雄二の決定など待たず、明久は頷いた。

「おい、明久。お前さっきから何様のつもり・・・「いいよね？雄二。」っ……………」

雄二は思わず明久に詰め寄ったが明久はにっこりと笑いながら雄二に聞く。しかしその目はあの獲物を見つけた獣のような目になっている。

「わ、分かった。交渉成立だ。」

雄二はいくらか明久に押され気味に承諾した。

「・・・・・・・・勝負はいつ？」

「そうだな。10時からでいいか？」

「・・・・・・・・分かった。」

こうして交渉は終了した。

そして明久たちが教室に戻る際に明久の目がソーマと合った。

そして二人は視線で会話する。

『よくやった。』

『当然でしょ？楽しみにしてたんだから誰にも邪魔させないよ。』



## 第20問 Aクラス戦交渉（後書き）

さてはて一体明久の目的は。これはできれば連日投稿を実行した  
いです。目標は一巻終了！

ではまた次回！

## 第21問Aクラス戦1戦目（前書き）

今回で明久の目的が明らかになります。

ではどうぞ！

## 第21問 Aクラス戦1戦目

「では両名準備はいいですか？」

今回の戦争の立会人は結構お世話になっている高橋先生だ。

「ああ。」

「……………問題ない。」

一騎討ちの会場はAクラスになっている。こちらの方が広いからだ。

「では一人目の方どうぞ。」

「オレが行く。」

そう言ってAクラスから出てきたのはソーマだ。

「そうか……………ならこっちは「明久、早く来い。」「急かさないでよ、ソーマ。」で、明久！？」

いつのまにかFクラスからは明久が出ていた。

「言っとくけど雄二。何を言われてもこれは絶対に譲れないよ。」

そう言って明久は雄二をギロリと睨みつける。

その眼光に思わず雄二もたじろぐ。

「さて……………ようやくだね、ソーマ。」

「ああ、まったくだ。」

二人のやり取りにAクラスもFクラスも首を傾げた。

「まったく……………いままで9回も戦って全部引き分けだからやになっちゃうよ。」

「同感だ……………だが、今回で、」

「うん。決着をつけよう。」

そう言って二人は構える。

「この10戦目で白黒はつきりつける！」

「明久、お前が科目を選べ。」

「それじゃあ日本史で！」

「「<sup>サモン</sup>試獣召喚！」」

日本史のフィールドが展開され、二人が叫ぶ。

幾何学的な魔法陣から出てきたのは学ランに木刀の明久の召喚獣にフードつきのコートを着、白く、召喚獣の2倍はありそうな巨大なノコギリを持ったソーマの召喚獣だ。

Aクラス ソーマ・シックザール VS Fクラス 吉井 明久

日本史 430点 VS 430点

「「「何いーーーーー!!??」」」

明久の点数を見たAクラスの生徒が絶叫した。

「アキ君と同じ点数・・・」

「でも、アキ君には操作技術がある。きっと大丈夫。」

点数を見てなのはは不安そうにつぶやくとフェイトが励ますように言う。

「「「・・・・・・・・・・」」」

一方二人はお互いににらみ合ったまま動かない。まるでお互いがほんのわずかでも動いたなら即座に攻撃を仕掛ける。そんな雰囲気だ。

まるで時が止まったかのように沈黙が流れる。

と、次の瞬間。

「「「!」」」

二人同時に動いた。

装備の重量が軽い明久の召喚獣が一足早くソーマの召喚獣の懷に

潜り込み、木刀を突きだす。

しかし、これをソーマの召喚獣は体をそらすことで避ける。さらに左手で木刀をつかんで明久の召喚獣の動きを止めると腹に蹴りを繰り出す。

それを明久の召喚獣は右手で防ぐ。そしてお返しと言わんばかりに蹴りを繰り出す。

ソーマの召喚獣は木刀をつかんでいた左手を放し、それで蹴りを受け止めると、右手でノコギリを横薙ぎに振う。刃は根本までであるため懷でも十分に切り裂ける。

明久の召喚獣はそれをしゃがんで避ける。足は別に固定されなかったので即座に下ろしていた。でなければ避けなかった。

そしてそこから木刀を切り上げる狙いはソーマの召喚獣の頭。

それをソーマの召喚獣はバック転で避ける。

それを見た明久の召喚獣はいったん距離を取る。

この間およそ10数秒。

その場にいた全員がポカンと口を開けた、高橋先生までも呆然としている。

するとまた二人の召喚獣は距離を詰める。

今度はソーマの召喚獣がノコギリの範囲に明久の召喚獣が入った

瞬間に両手でそれを振う。

明久の召喚獣はそれをジャンプして避けるとそのまま落下の勢いを乗せて木刀を振り下ろす。

ソーマの召喚獣はノコギリを蹴り上げて無理やり刀身を浮かし、それで防御する。

すると明久の召喚獣はノコギリに掴まる。ちょうど峰の部分なので問題ない。そこから逆上がりするような動作で蹴りを放つ。

さすがにこれには対処できず、蹴りはソーマの召喚獣の胸板を直撃した。

「ぐつ。」

するとソーマは胸板を押えながらうめいた。

さらに攻め込もうと明久の召喚獣は着地すると木刀を横薙ぎに振う。

それをソーマの召喚獣はノコギリの持ち手で防ぐ。更に右手を放すと明久の召喚獣の胸ぐらをつかんで引き寄せると頭突きをかます。

「ぐうう。」

明久は頭を押さえ、ふるふると振る。

その隙にソーマの召喚獣は距離を取る。

そしてお互いに体制が整うと再び接近した。

雄二たちは目の前の光景が信じられなかった。

召喚獣は操作にそれなりの技量を要する。

観察処分者の明久は人よりも召喚獣を操作してきた。だからその性能は高い。

だが、ソーマもかなり高く、更に明久のはさらに上がっているように見える。まるで召喚獣自身が自我を持って戦っていると思うような錯覚を覚える。

明久の召喚獣はソーマの召喚獣の一撃を避けると首元に木刀を突きだす。

ソーマの召喚獣は首を大きく傾げて避けると蹴りを放つ。

が、明久の召喚獣はそれを右手で掴み、更に左手の木刀を捨て、両手でつかむとそのまま力任せに投げ飛ばす。

ソーマの召喚獣はそのまま誰かのリクライニングシートに激突する。

「て、おい！召喚獣がシートに触ったぞ！」

「てことはまさか……」

「『観察処分者！？』」



Fクラスの声が重なる。

だがそれならあの操作技能も納得できる。

「ああ、そうさ。オレは観察処分者だ。」

叩きつけられた痛み顔に顔をしかめながらソーマは言った。

「3学期になつてな、そこから明久と観察処分者の仕事をこなしていた。」

「で、2人だから結構早く終わるんだよ。それでいくらか暇を持て余しているときに何回か模擬戦をやったんだよ。」

明久も説明する。

「だがそのすべてが引き分けに終わったんだ。」

「そうしているうちにいつか絶対に決着をつけてやるってお互いに意気込んだんだ。でも、模擬戦で決着をつけるのも面白くない。」

「だから試召戦争でつけようって話でまとまったんだ。」

つまりだ。

二人はライバル関係であり、この戦いで決着をつける事を長く待ち望んでいたということだ。

ソーマがCクラスへの戦争をふっかけたのも明久の連絡でこのままでは下手したら勝負が3ヶ月もお預けになる可能性がでてきたか

ら。

そういうことになる。

「そんなことが……………」

アリサは呆然と呟いた。

「さて……………ソーマ。もっと楽しむ？それとも……………  
決める？」

そう言って明久はプレデター、と呟いた。

次の瞬間。明久の召喚獣の木刀から黒い恐竜のような大顎が出てきた。

「ふっ、おもしれえ。受けて立ってやるよ。」

そう言っつとソーマはチャージクラッシュ、と呟いた。

すると白いノコギリから黒いオーラが出るとそれは刀身を覆ってより巨大な刃になった。

二人はお互いに笑みを浮かべながらゆっくりと召喚獣を構えさせる。

黒いオーラはまるで生きているように揺らめいて、プレデターは餓えたように顎をガチガチと動かす。

そして、

「「おおおおおおおおおおお！！！！」」

二人同時に雄叫びを上げながら召喚獣を走らせる。

ノコギリはリーチが伸びている。だからソーマは範囲に入った瞬間振えは勝てる。

しかしソーマの召喚獣は明久の召喚獣がノコギリの範囲に入ってもまだ振わない。

そして、明久の召喚獣がプレデターの顎を伸ばした瞬間、ソーマの召喚獣もノコギリを振う。

グチャリと言う音とザシュ、と言う音が響いた。

明久とソーマはお互いに黙って、召喚獣を見ている。

そこにはプレデターにより右半身を喰い飛ばされたソーマの召喚獣と、

ノコギリで首を切り落とされた明久の召喚獣が居た。

「君の・・・勝ち・・・だよ・・・ソー・・・マ」

そこで明久はフィードバックの激痛で意識を失った。

## 第21問Aクラス戦1戦目（後書き）

今回の勝者はソーマになりました。

でもこれで二人の戦いを終わらせる気はありません。

ソーマの詳しいプロフィールは一巻終了後に。

ではまた！

**第22問 Aクラス戦決着（前書き）**

今回は一気に最後まで書きました。

ではどうぞ！

## 第22問 Aクラス戦決着

「う・・・・・・・・」

明久は首に痛みを覚えながらも意識を取り戻した。

「！アキ君！」

その声と共に突然何かが明久の顔に覆いかぶさった。

「！？ふがつ！もがつ！」

突然の事に明久はテンパリ、手をばたつかせる。じつはそれ以外にも理由はある。

その覆いかぶさったのが明久の口と鼻を器用に塞いでいるのだ。

呼吸ができない明久がさらにはたつくと、

「フェイトちゃん。アキ君が苦しがつてるよ。ちょっと離れてあげたら。」

誰かの声が聞こえてきた。

「ああ、ごめん、アキ君。」

その言葉と共に覆いかぶさっていたものが離れていき、明久は气道が確保されたことに安堵して、息を思い切り吸い込んで、周囲の状況を見た。





ソーマ。」

「うるさい。俺も意識を失ってついさっき目を覚ましたばかりだし、しかもフィードバックの痛みであまりうまく動けねえんだよ。」

「なんで甘んじて受け入れてるの？」

「周囲の連中の目がなんか言外に動くなってるように見えるんだよ。」

そう言われて明久はAクラスに目を向けると確かにどこことなくしばらくそのままにしたら、てきな感じはする。さすがにソーマの言うような感じはしないが。

「大変だね。それはそうと君は？」

明久はソーマを膝枕している少女が気になったようだ。

「あ、初めましてだね、吉井君。ボクは工藤愛子だよ。よろしくね。」

「うんよろしく、工藤さん。」

「おい、いい加減にこれをやめろ。」

ソーマが不機嫌を隠そうともせず言う。

「どうせだからもうしばらくそつしてもらったら？」

「ぶつとばすぞ。」

明久がニヤニヤしているとソーマは彼をギロツと睨みつけた。

「ってそれよりも試召戦争はどうなったの？」

明久は今何をやっているかを思い出し、周りに聞く。

「アキ君達が意識を失ったから一回中断したの。でももう再開してもいいかな。」

なのはは明久に答える。

「そう。じゃあお願いします。高橋先生。」

「分かりました。では二人目は出てきてください。」

「じゃあ僕が。」

Aクラスから出てきたのは今年第2位の久保利光。

「よし、ここは姫路「いや、俺が行くよ。」は？」

雄二の言葉を遮って出てきたのは空だ。

「おい空。お前勝つ自信があるのか？」

「とりあえず今回は気合を入れてきたから大丈夫だと思うけど・・・  
・・・それ以前にあの状態の姫路を解放するのか？」

空が指差した先にいたのは今にも明久に飛びかかり殺陣の実演を

行いそうな瑞希と美波とその二人を懸命に抑えているアリサとはやて。

あ、今二人が最終手段の気絶を行使したため二人は崩れ落ちた。

「……………お前に任せる。」

「アイアイ。」

空はそう言つて前に出た。

（さて……………雄二の件があるから選択はできねえな。出来れば生物を選んでほしいな……………）

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします。」

その言葉にFクラスに（生き残り）不安が走る。

「大丈夫なのか？空のやつ。」

「分からぬが……………わしは空を信じる。」

コウタの言葉に秀吉は不安げにしながらも信頼を込めて答える。

Aクラス 久保 利光 VS Fクラス 青葉 空

総合科目 3997点 VS 4000点

おお、という言葉が漏れた。ギリギリで勝つことができた。

「やるじゃないか、青葉君。」

「ふう、よかった。それじゃあ……一発で決めてやるよ。」

そう言うとき空は召喚獣の武器を銃に切り替え、

「Lv3ブラッドレイジ。」

呟いた。

次の瞬間、銃からとてつもなく巨大な紫の炎が螺旋を描きながら吐き出された。

それは軽く、召喚フィールドを呑みこむほどの大きさだった。

「な!?!」

久保は驚愕し、何とか避けようとするがそもそも召喚フィールドを呑みこんでいるから意味がない。

そして久保の召喚獣はあっけなく炎に呑みこまれ、消し炭になった。

「しょ、勝者、Fクラス。」

高橋先生は目の前で起きたことに戸惑っていた。

「よし、何とかなったな。」

そう言って空は戻った。

「おいおい何だよ空！スゲー腕輪持ってんじゃねえかよ！」

その空にコウタが肩を組んでくる。

「そうは言っても点数の9割がた持って行かれるから使い勝手が悪いんだよ。」

「にしたってあの範囲は反則じゃぞ。」

秀吉も近寄って話に加わる。

「まあ、そうだな。正直ぶっ放した俺も驚いてる。」

空は苦笑した。

「最後の一人、どうぞ。」

「……………はい。」

そして最後の勝負。Aクラスからは最強の霧島翔子。

Fクラスは、

「俺の出番だな。」

坂本雄二が出る。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史。内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の言葉にAクラスはどよめきはじめる。

「上限ありだって？」

しかも小学生レベル。満点確實じゃないか。」

「注意力と集中力の勝負になるぞ。」

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っててください。」

一度ノートパソコンを閉じて高橋先生は教室を出ていく。

その背中を見送って明久は雄二に話しかける。

「雄二、あとは任せたよ。」

「ああ。任された。」

二人はお互いに手を握り合う。

「しつかり決めるんやで、坂本君。」

はやてがバンバンと雄二の背中を叩く。

「ああ、分かってるよ。」

「坂本さん、ちゃんとやってきたんでしょうね。」

アリサがじつと雄二を見る。実は作戦を聞いた日に念のために復習をしておくようにとアリサは雄二に言っていた。

「ああ、大丈夫だ。」

「ならいいんです。頑張ってください。」

そう言ってアリサは下がった。

「では最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に来てください。」

戻ってきた高橋先生が二人に言う。

「……はい。」

「じゃ、行ってくるか。」

二人はそろって教室を出ていく。

「皆さんはここでモニターを見ていてください。」

高橋先生が機械を操作すると壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出される。

そして翔子、雄二の順に席に着く。

「では問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。」

「

日本史の飯田先生が問題用紙を裏返し、二人の机に置いた。

「不正行為は即失格になります。いいですね？」

「……はい。」

「分かっているさ。」

「では初めてください。」

二人が問題用紙を解き始める。

「吉井君、いよいよですね。」

「そうだね、いよいよだね。」

瑞希は明久の隣に立っているが、明久は若干びくついている。ちなみにFクラスの面子は全員目を覚ましているがさすがに空気を読んで暴れたりはいしていない。



「出ててくれよ、あの問題。」

「もし出ていなかったら坂本は……」

「ま、延長戦で負けるだろうね。」

みんなが必死に祈っていた。

そして、

（ ）年 大化の改新

「あ………！」

神はFクラスに手を差し伸べた。

「あ、アキ君！」

「うん。」

「これで俺達、」

「アタシたちの卓袱台が、」

「システムディスクに！」

Fクラス全員の声がそろった。

「最下層の僕たちの歴史的な勝利だ！」

「うおおおおっ！」

教室を揺るがすような歓喜の声。

日本史勝負 限定勝負 100点満点

Aクラス 霧島 翔子 97点 VS Fクラス 坂本 雄二  
53点

どうやら神様はいたずらが恐ろしく大好きのようだった。

第22問 Aクラス戦決着（後書き）

次回で一巻は終了です。

そのあとデートをはさみ、二巻へ。

デートは誰？さあ……誰でしょう。

では次回！

第23問 Aクラス戦後（前書き）

連日投稿と書いておきながら・・・・・・・・・・はあ。

まあ書きあがりましたのでどうぞ！

## 第23問 Aクラス戦後

「一対二でAクラスの勝利です。」

「……………雄二私の勝ち。」

床に手をついている雄二に翔子が歩み寄る。

「……………殺せ。」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「てめえにはこの世の地獄を見せてやる！」

「楽に死ぬると思うなよ！」

明久、コウタ、空が犬歯をむき出しに吠える。

「吉井君、落ち着いてください！」

「コウタ君、とりあえず落ち着こうや！」

「空も頭冷やさない！」

明久は瑞樹、コウタははやて、空は優子が後ろから抑える。

「だいたい53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるけどこの点数だとー」

「いかにも俺の全力だ。」

「この阿呆がぁー！僕でも満点行けるぞ！」

「ていうかお前アリサに復習しとけって言われたろが！無視したんだな！」

「あの時の大丈夫はそんなしなくてもって意味だったんですか！？ふざけないでください！」

アリサもかなりお冠だ。まあ、折角アドバイスしたのにそれを無視されたのなら当然かもしれない。

「みんな、とりあえず落ち着こう！ここで坂本君を痛めつけても結果は変わらないから！私もすぐく不服で不満だけど！」

なのはが声を張り上げてみんなに言うのと全員しぶしぶ引き下がった。

「…………でも、危なかった。雄二がしょせん小学校の問題だと油断していなければ負けてた。」

「言い訳はしねえ。」

その言葉に明久は本気で股間を蹴り潰してやろうかと思った。

「…………ところで約束。」

「……………！（カチャカチャ）」

翔子の言葉と共にムツツリー二がカメラの準備を始める。空は割と本気で頭を抱える。

「分かっている。何でも言え。」

「……………それじゃあー」

翔子は一度瑞希に視線を送り、再び雄二に戻し、小さく息を吸って、

「……………雄二、私と付き合って。」

と言った。

その言葉にその場にいる全員の目が点になる。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか。」

「……………私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き。」

全員の思考能力がいまいち發揮していない中で空はうまく呑みこんだ。

翔子は小さい頃から雄二の事が好き。

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……………私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない。」

「

異性に興味がないというのは一途に雄二を思っていたから。瑞希を見ていたのは雄二の近くにいる異性が気になったから。

そこで空の顔に喜色が浮かんだ。大嫌いな同性愛じゃないというのがよほど嬉しいようだ。

「……………拒否権は？」

「……………ない。約束だから。今からデートに行く。」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束は無かったことにー」

翔子は雄二の首根っこをつかんでそのまま教室を出て行った。

あまりの出来事にみんな言葉が出ない中空だけ笑顔で手を振っていた。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ。」

その声にみんなが振り返るとそこには生活指導の西村先生が立っていた。

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスの補習について説明しようと思ってな。」

我がつていう所にFクラス全員ん？と思った。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで福原先生から俺に



担任に変わるそうだと。これから一念死にもの狂いで勉強できるぞ。」

「『なにいつ!?!?』」

クラスの男子全員が悲鳴を上げた。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは思わなかった。でもな。いくら学力が全てではないと言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、ないがしろにしているものじゃない。」

西村先生の正論に全員ぐうの音も出ない。

「吉井。お前は坂本と共に念入りに監視してやる…….と言いたいところだが最近では真面目に勉強しているようだし特別に普通の監視にしてやる。」

「やったー!!!」

明久はその場でジャンプして喜ぶ。その光景に幼なじみ3人組は苦笑する。

「とりあえず補習は明日から授業とは別に補習の時間を二時間ほど設けてやろう。」

それを聞いた明久は喜ぶのやめると、ちょっと何か考えるように顎に手を添える。

そして携帯でどこかに電話をかけた。

「あ、もしもし、土郎さん？ すいませんこんな時間に。 ちょっとバイトの件で話が・・・・・・・・え？ 今から来てほしい？ はあ・・・・はい・・・・はい・・・・分かりました。 それじゃあすぐに行きます。」

そう言っ て明久が携帯を閉じると美波が歩み寄っ てきた。

「さあ~~~~て、アキ。 補習は明日からみたいだし、今日はクレー プでも食べに行きましょうか？」

「へ！？ なにそれ！ そんな約束した覚え・・・・」

「だ、ダメです！ 吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？ 姫路さん。 そんな約束もした覚えがないよ！ ていう か今日は絶対無理だよ！ バイトが入ったんだから！」

「へっ？」

明久の言葉に二人は目を丸くした。

「明久、バイトしてたのか？」

そこにコウタが入っ てきた。

「うん。 仕送りだけじゃ、買えるゲーム限られるからね。 さっき、平日はバイトできなくなるかもっ てむねを伝えようとなんでも急に従業員の人が1人帰っ ちゃっ て至急来てほし っ て言われたんだ。 そっ っ というわけだから！」

そう言つと明久は教室を走つて出て行つた。

「はあ、お父さんも人使いが荒いなあ。」

なのはは呆れたようにため息を吐いた。

そのなのはをはやてはまあまあと肩を叩く。

そんな中フェイトは、

（・・・・・・よし、今度の週末。週末に誘おう！）

と、その手に密かに握りしめた映画のチケットを持って決心していた。

## 第23問 Aクラス戦後（後書き）

この後はデート編を書きたいと思います。

書き終わったらゴッドイーターに集中しようと思つので遅れます。

では！

第24問 デートに行ってみよう！（前書き）

すいません遅れて。

仕事が忙しくて・・・いえすいません。本当はセブンス  
ドラゴン2020にはまっていた。

あれはメチャクチャおもしろいですよ！ぜひ買ってやることをお  
すすめします！

まあ宣伝はこれぐらいでどうぞ！

## 第24問 デートに行ってみよう！

週末の日曜日。

明久は映画館の前の広場にあるベンチに座っていた。

かれこれ10分ほど待っている。こういうのは男が先に待っているのが常だ。

「・・・・・・・・ていうかなんで男が先に待つてなくちゃいけないんだろう・・・・・・・・」

小さい頃から幼なじみ3人との待ち合わせの時は明久が先に来て待つていた。

一回に遅れたときには3人とも終始不機嫌だった。

「・・・・・・・・・・本当に女心って分かんないなあ・・・・・・・・」

彼女たちとはかれこれもう8年の付き合いだが未だに複雑な女心が分からない明久だった。

そうやってぼけ、としていると、

「アキく〜ん。」

手を振って明久の待ち合わせ相手ーフェイトが駆けてきた。

「ごめんね、アキ君。待った？」

「ううん。僕もさっき来たところだから大丈夫だよ。」

明久は笑顔で答える。今日はフェイトに誘われて、映画を見に来ていた。

「そう。それじゃあ早く行こ。」

そう言つとフェイトは明久の手を握つて映画館に向かつて走つた。

「ちょ、ちょっとフェイト。そんな慌てなくても。」

明久は引つ張られる形で入っていく。

そんな二人を遠方から見ている人影3つ。

「くつくつくつ。ええ雰囲気やな、あの二人。」

はやてはニヤニヤを一切欠片も隠そうとしていない。

「なんていうか……本当にアタシたちいい性格していますよね……。」

アリサははあ、と深いため息を吐いた。ちなみに今やってるのは典型的な覗きだ。

「じゃあ、なんでアリサちゃんはついてきたん？」

確かにアリサの言うことが本心ならついてこないということになればよかっただろう。ちなみ今回は有志だった。

「はあ……なんていうか……変な心配心が出てきまして……」

アリサは頭を掻きながら何とも歯切れの悪い言葉を口にした。

「なんや、それ？」

はやてはその歯切れの悪さに首を傾げる。

ちなみに、

「ううううう~~~~~」

ここにハンカチがあつたならすぐにも噛みついて思いつきり引っ張りそうな雰囲気にいる3人目は明久と最も付き合いの長いのはである。

「なのはちゃん。うらやましいのは分かるけど、邪魔しちゃうかな？あくまでも今回は覗きや。」

「それもどうかと思うんですけどねえ……」



なのはをなだめるはやての言葉にアリサはやれやれと首を振る。

「ていうか覗くんなら覗くでさっさとおいか……」

そこでアリサの動きが止まった。

アリサの行動に疑問を持ったのかはやてとなのはも目を向ける。  
そして止まった。

その視線の先には瑞希と美波が居た。眼にすさまじい殺気を宿し、  
その手に釘バット（赤い染みつき）を持って。

「なのはちゃん、アリサちゃん！行くで！」

「うん！（了解です！）」「」

はやての言葉と共に3人は急いで飛び出す。

「ちょっと、二人とも！」

「？なのはにはやてにアリサ？何やってんのよ。」

「それはこっちのセリフや！その物騒なもんもって何してんねん  
！」

「何って決まってるじゃないですか！吉井君にお仕置き……」

「あれのどこにお仕置きする必要があるんですか！そもそもそんなの使ったらお仕置きじゃなくて殺人ですからね！」

そもそもこの二人はどこから明久たちのデートの事を嗅ぎ付けたのだろう。確か二人はそのことを言っていなかったはずだ。ちなみにはやては偶然誘ってるところを見ていた。

「あつ、美波ちゃん！吉井君達いつの間にかいません！」

「こうしちゃいられないわ！行くわよ、瑞希！」

「はい！」

次の瞬間二人は走り去っていた。

「はやっ！？」

「驚いてる場合ちゃう！早く追わなあ！」

「急ぎましょう！じゃないと明久が！」

3人も急いで映画館に向かって走った。

「それでフェイト、何が見たいの？」

映画館に入った明久はフェイトに聞く。

「うん、最近話題の恋愛映画・・・」

そこで突然フェイトの動きが止まった。

「どうした・・・の・・・」

明久が同じ方向に目を向けて、同じように固まった。そこには、

「・・・雄二、何見たい？」

「・・・俺の願いは・・・叶えられるのか？」

翔子と木目が渋い木の手錠を付けた雄二がいた。ちなみにその手錠からは鎖が伸び、翔子が持っていた。

「え・・・と・・・雄二・・・BASARAの黒田  
○兵衛のコスプレ？」

「それだったらどんなに楽か・・・」

雄二は恐ろしくげんなりとした様子で呟いた。

「・・・じゃあ、地獄の黙示録完全版。」

「おい！それ4時間8分もあるじゃねえか！」

「・・・2回見る。」

「8時間16分も座ってられるか！」

そう言って雄二は逃げようとするが、

「逃がさない．．．．座るのが無理だったら寝ててもいい．．．  
（バチバチ）」

「いや、それは気絶ギアアアアアアア——」

翔子はどこからともなくスタンガンを取り出し、雄二に押し付けて  
 気絶させ、そのまま引きずってカウンターに向かう。

「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
学生一人分。  
」

「はい。学生二人。また気絶して無駄な学生二人ですね。」

そのような光景を目にしても店員は営業スマイルを崩さない。とうかまたということは前、恐らく試召戦争後のデートの時もだったのだろう。

そのまま映画館の中に消えていく二人。

あまりの光景に明久とフェイトは唖然としていた。と、

「なんか……すごい光景でしたね。」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには明久より色の濃い茶髪で癖つ毛で女の子っぽい顔をした少年がいた。

「あれ？レン、こんなところで何してるの？」

「何って……映画見に来たに決まってるでしょ。」

レンは呆れたように言った。

彼は雨宮レン。明久たちと同じ文月学園の2年生で翠屋でアルバイトしている少年だ。

「そっちは……いえ、変な詮索は野暮ですね。」

レンはニヤニヤしながら言う。

「ちょっとレン……」

「いえいえ、僕の事は気にせずささ、どうぞどうぞ。」

顔を赤くするフェイトをしり目にレンはほれほれと促す。

「っ！……もう、行く、アキ君。」

「う、うん。」

フェイトは思わず怒鳴りそうになるが時間も無いため明久を連れて映画館に入っていく。

それをレンはニヤニヤと見ていた。

一方なのはたちかというと、

「へえ……あの子男の子なんですか。」

「そうなんだ。私も初めて会った時は驚いたよ。」

「私は未だにボクっ娘なんじゃないかとうたがってるけどな。」

何とか瑞希、美波を捕まえ、再び覗きを実行していた。

あの二人は変に暴れないようにしつかりとなのはは瑞希のアリサが美波の服をつかんでいた。

「掴んでいたはずだが……」

「あれ！？あれ、瑞希と美波じゃないですか！？」

「うそ！？ちゃんと服を……あれ！？いつのまにか抜けられてる！」

そう、いつのまにか二人はなのはとアリサの拘束から抜け出していた。

「何その高度な技術！て言うかあかん！早くしないと……」

そこではやては止まった。

その視線の先ではレンが2人と何か話していた。

「さて、それじゃあ僕も映画でも」「ちょっと待って（ください）  
」「ん？」

レンが振り返るとそこには阿修・・・瑞希と美波が居た。

「あ、あの・・・僕に何か・・・」

あまりの殺気にレンはかなりビクつく。

「あんたアキと随分仲良さそうだったけど・・・」

「誰なんですか？」

「え、えつと明久さんと同じところでバイトしている雨宮レンです。こう見えても男ですので・・・」

「そう・・・ところでアキとフェイトは何の映画を見に行ったの？」

「へ？そんなの聞いてどうするんですか？」

「決まっています！吉井君がフェイトちゃんに変な事をしないように見張るんです！」

見張るなら釘バットはいらないだろうとレンは思った。

そして同時にこの人たちを明久に合わせたら間違いなく明久は殺されるとも思った。

（・・・・・・・・・・そうだ。）「え〜〜とですね・・・・・・  
確か・・・・・・・・地獄の黙示録を2回見るって言ってましたかね  
え・・・・・・・・」

「地獄の黙示録ね！ありがとう！」

「そんな長い時間暗い所に・・・・やっぱりフェイトちゃんを襲  
うつもりだったんですね！許しません！」

そのまま二人はカウンターに行ってチケット購入。見当違いの水  
ールへ急行した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・バカで良かった。」

レンがふうとため息を吐くと、

「「レン君！」」

なのは、はやて、アリサが駆け寄ってきた。

「あ、はやてさん、なのはさん。それと・・・・・・・・そちらの方は初



めましてですね。僕は雨宮レンです。男ですのでよろしく。」

「あ、どうも。アリサ・イリニーチア・アミエーラです……。じゃありません！」

「レン君！さっきいたピンクの髪の子とポニーテールの髪の子との映画に入った！？」

なのはの言葉にレンはああ、やっぱりかあと思った。明久をめぐる女性関係は彼も知っている。

「地獄の黙示録です。」

「「「へっ？」「」」

「もちろん明久さん達は別の映画ですよ。まあ、足止めですよ。足止め。これなら大丈夫でしょ？」

「ま、まあそうだね。」

「やるなあ、レン君。」

「あれ、4時間8分もありますよ……。確実にじゃないですか。」

「まあね。では僕も映画を見たいんでこれで。」

そう言ってレンは頭を下げるとカウンターに行った。

第24問 デートに行ってみよう！（後書き）

はい、これであのバカ二人は足止めです。

あの二人は居ないことに気付かず最後まで見そつな気がする。

では次回！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1971t/>

---

バカとリリカルとゴッドイーター

2011年11月26日20時46分発行